

十全同窓会会報 175

2020 / 5



目次 | CONTENTS

卒業生に贈る言葉……………03	金沢から世界へ発信……………15	教室だより……………26
就任挨拶……………04	第2回鈴木大拙-西田幾多郎記念 金沢大学国際賞授賞式および記念講演会…16	支部だより・クラス会……………28
退職のご挨拶……………09	医師国家試験結果……………17	令和2年金沢大学関東放射線医学・ 核医学同友会総会開催……………32
ナノ精密医学・理工学卓越 大学院プログラム……………13	十全学術行脚……………18	学生コーナー……………33
松原藤継名誉教授を偲んで…14	病院紹介……………24	令和2年3月卒業生進路 ……35

2020年度 金沢大学医学部十全同窓会総会

※新型コロナウイルス感染症への対応により、9月に延期いたします。

日時 2020年9月12日(土) 午前9時～
場所 十全講堂

式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、報告
- 一、医学系・医学類報告

土屋 弘行 理事長
杉山 和久 医学系長・医学類長
堀 修 医薬保健学総合研究科長
田嶋 敦 先進予防医学研究科長
- 一、医薬保健学総合研究科報告
- 一、先進予防医学研究科報告
- 高安賞贈呈式
- 一、支部紹介
- 一、議案審議
 - (一) 2019年度事業及び決算報告
 - (二) 監査報告
 - (三) 2020年度事業計画及び予算案
 - (四) 役員改選
 - (五) その他
- 一、閉会の辞

《教授就任記念講演》午前10時～12時

転移性前立腺癌のホルモン依存性から非依存性へのメカニズムの解明

泌尿器集学的治療学 溝上 敦 教授

循環器領域における再生医療開発

循環器内科学 高村 雅之 教授

自閉スペクトラム症幼児の脳の特徴を捉える

精神行動科学 菊知 充 教授

ニク細胞の発見とそれを標的とした免疫制御剤の研究開発

幹細胞免疫制御学 渡会 浩志 教授

◇教授就任講演は、脳・神経医学領域、がん医学領域、循環医学領域、社会環境医学領域、内科系・外科系医学領域、生殖・発達医学領域のUp-to-dateコースを兼ねます。

◇石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

◆9月時点で新型コロナウイルス感染症が収束していない場合、金沢在住および近郊の会員の出席で開催いたしたく、ご理解いただきますようお願い申し上げます。また、この場合には教授就任講演は延期とさせていただきます。

卒業生に贈る言葉



医学類長

杉山 和久

卒業生の皆さん、金沢大学医学類のご卒業、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。楽しかった学生生活も終わり、プレッシャーがかかった医師国家試験も終わり、ほっとした休みもつかの間(これもコロナウイルスのために自粛でかわいそうでした)、研修医としての新しい生活がスタートしたことと思います。今までの勉強は医師になるための準備であり、これからが医師としての実地の勉強です。卒業生全員が同じスタート台に立ったと言えます。まさにこれからが皆さんの人生の新しいスタートです。人生はよくマラソンに例えられますが、焦らずに着実に走りましょう。「継続は力なり」という言葉があります。何事も諦めずに続けることが重要で、自分の人生をかけたライフワークとなる仕事が残せたら素晴らしいことです。

私は1984年(昭和59年)に金沢大学医学部医学科を卒業しました。参考になるかわかりませんが、皆さんの先輩とし

て、自分自身が若い頃にどのように勉強したかをお伝えしたいと思います。

1. 最初の10年が重要である：金大で臨床実習に回っているときに、「最初の10年は大事だから死にものぐるいで頑張れ」とある内科の教官に言われました。また、入局した眼科学教室の医局長からは、「最初の6年で一生の臨床力が決まる」ともいわれました。これは本当だと実感しています。若い時に実地臨床の基礎力を身につければ、後はそれに上乗せで行けます。それには人の嫌がることを進んですることです。私は急患手術にはできる限り参加するようにしました。手術日は外回りでも何でもいいので、とにかく手術室で手術を見ながら雑用をしました。入院患者も進んで受け持ち、主治医として最高10名は持ちましたが、へとへとでした。

2. 同僚、先輩、後輩の症例でも勉強する：これは私のオーブンの先生から教わりました。また、旧第2内科教授であった竹田亮祐名誉教授も講義の時に述べられました。自分1人の経験できる症例は限られています。人の症例で勉強するのは。それにはいい方法があります。当直の時や、時間の空いた時に、病棟の全症例のカルテを読み込むのです。眼科病棟には40人の患者さんがいましたので、週1回は全員のカルテを読みました。すると治療経過、検査所見など、診断から治療、管理まで手に取るようにわかりました。週1回の教授回診が楽しくなりました。

3. 英会話の勉強は大切、留学につなげる：私は学生時代に金大城内キャンパスのESS(English Speaking Society)に所属したものの、途中で挫折して、英会

話は苦手でした。ところが郷里の岐阜大学ですが、入局した眼科の教授は日系米国人かと思うほど英語が堪能で、舌を巻きました。それに奮起して英会話を一生懸命勉強して、米国オレゴン州ポートランドに留学しました。世界の人々とコミュニケーションをとるのは楽しいですし、若いうちから英会話を勉強して、世界に羽ばたいて欲しいと思います。

4. 師との出会いは人生を変える：私の人生を一変させたのは、一生の師と仰ぐ眼科教授との出会いでした。15年間に渡り師事して緑内障を学び、自分のライフワークとしました。眼科研修医2年目で出会い、人生の目標、研究の面白さ、生きる上での指針を与えられた気がします。皆さんはこれからさまざまな職場で働くことになりますが、自ら尊敬できる師となるべき先生を求めて欲しいと思います。

最後になりますが、私の尊敬する前任の河崎一夫名誉教授の言葉を卒業生の皆さんに送りたいと思います。これは2002年4月の朝日新聞朝刊「私の視点」に、掲載された「医学を選んだ君に問う」という論説から一部引用します。「最後に君に願う。医師の喜びは2つある。その1は自分の医療によって健康を回復した患者の喜びがすなわち医師の喜びである。その2は世のため人のために役立つ医学的発見の喜びである。その1の喜びは医師として当然の心構えである。これのみで満足せず、その2の喜びもぜひ体験したいという強い意志を培って欲しい。心の真の平安をもたらすのは、富でも名声でも地位でもなく、人のため世のために役立つ何かを成し遂げたと思える時なのだ。」



就任挨拶



大竹 茂樹

(昭和52年卒業)

卓越した教育研究、 社会実装を推進するため、 更なる改革を計画・実施

令和2年4月1日付けで、国立大学法人金沢大学理事・副学長に再任されました。担当は総括・大学改革・附属病院となります。併せて同窓会・金沢大学基金、ならびに国際基幹教育院と後述す

金沢大学理事・副学長に再任

る融合研究域も担当いたします。十全同窓会の皆さまには、ご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

金沢大学は第三期中期目標期間において重点支援③(卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を機能強化の中核とする国立大学)を選択いたしました。この目標を達成するためにさまざまな改革を行って参りました。その成果の一部は、世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)によるナノ生命科学研究所の創設や卓越大学院プログラムの採択に結実しました。更に改革を進めるため次にご紹介するさまざまな改革を計画・実施しています。

医薬保健学域に新しい「医薬科学類」(設置審査のため仮称、入学定員18名)を令和3年度に設置いたします。これは、伝統と実績のある医学系と薬学系の協力により基礎医学者や創薬科学者の育成を目指すまったく新しい4年制の学類です。医学と薬学の知識を基盤として、新たな発想に基づく基礎医学研究の発展に繋げたいと考えています。また、

6年制の薬学類は入学定員を65名に増員します。

新しい研究域・学域として、融合研究域を本年4月に発足させました。これを母体として来年度に「融合学域先端科学類」(設置審査のため仮称、入学定員55名)を開設します。この学類は、未来社会の課題解決を志し、これからの社会変革を先導する人材の養成を教育目標とします。文理融合型教育と国際的な展開力を持つアントレプレナー教育を実施する計画です。日本人学生だけでなく、外国人留学生や企業で活躍する社会人学生などの多様な学生が互いに高め合う環境の下で特色ある教育を展開いたします。

附属病院では、新中央診療棟を計画しています。がんゲノム医療や高難度手術に対応するためには、現在の附属病院では手狭になってきました。新たな地域医療構想や医師の働き方改革などの諸問題に先手を打って、地域医療の最後の砦、高難度医療を研究・実施できる体制を整える計画です。

最後になりましたが、十全同窓会の皆さまの金沢大学への暖かいご支援をお願い申し上げます。



和田 隆志

(昭和63年卒業)

地域に愛され、 世界に耀く大学として 発展できるよう全力を尽くす

この度、令和2年4月1日付けで山崎光悦学長から理事(研究・社会共創担当)・副学長を拝命いたしました。これまで、平成30年4月1日から2年間、医学系長および医学類長を務めさせていただきました。この間、十全同窓会の皆さまにご指導とご支援をいただきましたことを改

金沢大学理事・副学長に就任

めまして御礼申し上げます。

現在、金沢大学は平成28(2016)年度から始まった第三期中期目標・中期計画の5年目にあたり、さらなる高みを目指して改革が進められています。その重要な礎として、重点支援③「卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を機能強化の中核とする国立大学」を選択しています。この明確な目標の達成に向けて、医学系の果たす役割はとても重要です。そのためにも、医学系の獨創性・多様性のある研究が一層発展することがますます期待されます。幸い、十全同窓会の先輩の皆さまがこれまで築き上げてこられた素晴らしい伝統があります。これを基盤にして、医学系の特色、専門性と多様性を最大限に活用し、一致協力して有機的な連携をより深めていくことが必要です。そして、高水準の研究のさらなる展開により、医学系・医学類・附属病院が一丸となって金沢大学の「世界で卓越した研究」を牽引することが重要だと思います。

人材(財)はまさに財産、宝であり、その育成こそ要です。将来の医学・生命科学・医療などさまざまな分野の発展に寄与する人材(財)を輩出し続ける

ことは金沢大学の重要な使命であると思っています。そのためにも、研究・教育環境の一層の整備と醸成を円滑に進め、人材(財)の育成をさらに目指していきたいと思います。幸い、令和3年度に受審予定の医学教育の国際認証取得に向けて、医学類が一丸となって教育カリキュラムの改善と実践を行っています。さらに、海外研修を含むカリキュラム改革など、新たな教育体制が構築され、実践されています。卓越大学院プログラムにも採用され、附属病院もがんゲノム医療拠点病院に指定されるなど、研究・診療・教育の基盤はますます充実しております。医学系・医学類・附属病院の研究力、英知を結集し、世界の医学・生命科学・医療・行政等の分野をリードする卓越した研究力、活躍しうる創造性豊かな医師、医学研究者の育成を推進できれば社会貢献に密接に繋がることは論を俟ちません。関係の皆さまと連携を一層深め、金沢大学がこれまで以上に地域に愛され、世界に耀く大学として大きく発展するよう全力を尽くす所存です。

引き続きまして、十全同窓会の皆さまの温かく力強いご支援を賜るとともに、ご高導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



中村 裕之

(昭和60年卒業)

世界をリードする 先端的研究者を養成するための 新学類を設置

この度、2020年4月から医薬保健研究域長・学域長(二期目)を引き続き、拝命することになりました。一期目の任期の2年間、「Next Challenge—教育組織等改革構想～Roadmap to 2020～」の一

金沢大学医薬保健研究域長・学域長に就任

環であります医薬保健学域の改組には、十分議論を尽くし、慎重な選択を行うことによって医薬保健学域のプレゼンスを高めることに最大限、尽力して参りました。特に新学類「医薬科学類(仮称)」(予定入学定員18名)につきましては2021年4月の設置に向けまして万端な準備をして参りました。新学類では、基礎医学・薬学研究の高度化・先進化に対応し、世界をリードする先端的研究者を養成することを目指し、医薬融合の基礎知識を身につけ、早期から研究マインド・能力を育んだ上で、深い専門性を醸成するような教育カリキュラムが実施される予定です。設置に向けましては、関係各位の多大なご尽力の元ではありますが、保健学類、創薬科学類からの入学定員振替は医薬保健学域にとっても苦渋の決断でありました。その貴重な定員枠を虎の子として新学類の設置と運営に生かされるよう重い責任を感じているところでございます。また医薬保健学領域の全般にわたるビッグデータ、AI、数理データサイエンスをはじめとする今日的な社会課題に対応した新センター構想は医薬保健研究域の先生方の英知が結集さ

れ、設置に向けて準備しております。この背景には、近年では、100歳健康寿命を合言葉に、100歳までは健康でいられるような予防医学と高度に発展した個別化医療および福祉の充実が掲げられるようになってきました。このように今後、健康関連の学問が果たす役割は地球規模での増加が予想されるため、医薬保健研究域は、医学、薬学、保健学の多分野の教育研究資源のますますの共有化と人的交流を図ることによって、金沢大学が地域や世界に益々、貢献することができると考えます。また昨年度、先進予防医学研究科と医薬保健学総合研究科が、他の2研究科とともに申請しました「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」が採択されました。これも医薬保健研究域の発展にとっても千載一遇のチャンスと捉えることができると考えております。

是非とも、十全同窓会の諸先生方には、医薬保健学研究域と医学系の益々の発展へのご協力をいただきますとともに、今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



堀 修

(特別会員)

融合研究の芽を 高度人材育成に繋げる 新たな仕組み作りに尽力

現在、IoTやAIなどの情報科学技術が飛躍的に進歩する一方、少子高齢化や経済の不安定化、災害の増大、そして新たな感染症の拡大など重大かつ切迫した問題が次々に起こっています。このような中、

金沢大学医薬保健学総合研究科長に再任

社会から国立大学、その中でも大学院に求められる役割は増加し、かつ変化していると言えます。金沢大学大学院医薬保健学総合研究科においても、従来からの高度専門医療人、世界レベルの基礎研究者を育成する、というミッションに加えて、新たな分野・課題に果敢にチャレンジし、社会にイノベーションを引き起こすような人材の育成が求められています。大学院教育の基盤となる研究活動についても、個々の研究の進展のみならず、他分野との融合研究の推進が強く求められているところであります。

私は平成28年4月より医薬保健学総合研究科長を務めさせていただきました。この間、皆さま方のご尽力により、「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン」、「日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム」、「ロシア・東アジア地域をつなぐ先制医療リーダー育成プログラム」などの大型教育プログラムが採択され、現在、着実に高度医療人材育成、およびグローバル人材育成が進められています。更に令和元年には卓越大学院プログラム「ナノ精密医学・理工学

卓越大学院プログラム」も採択され、今後、新たな融合研究を基盤とした、まさに現代社会の要請に応える高度人材育成が期待されております。

今後2年間、私は特に現在各分野で生まれつつある融合研究の芽を高度人材育成に繋げるための新たな仕組み作りに尽力させていただきたいと考えております。具体的には、令和3年4月に医薬保健学域内に設置される予定の4年制の新学類、医薬科学類に連動させる形で、医薬保健学総合研究科内に新専攻を設置し、従来のコアカリキュラムにとらわれない、融合研究を基盤とした学士課程・大学院一貫教育を行うものであります。10年、20年後の社会で真に求められる博士人材の育成を目指し、医薬保健学総合研究科内はもちろん、大学本部、先進予防医学研究科、附属病院、がん進展制御研究所、その他関係部局の先生方と議論を重ね、その実現に努めたいと考えております。十全同窓会の諸先生方におかれましては、これまでにも増してご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

就任挨拶



田嶋 敦

(特別会員)

予防医学教育の 充実・高度化を図り、 大学院教育の国際化を推進

令和2年4月1日付で、大学院先進予防医学研究科長を拝命いたしました。大学院先進予防医学研究科は、千葉大学、金沢大学、長崎大学を構成大学とする共同大学院として平成28年4月に設

金沢大学大学院先進予防医学研究科長に就任

置され、この3月には、研究科第一期生が標準の修業年限での課程修了を迎えました。私は、平成26年9月に本学に着任し、革新ゲノム情報学分野の担当を任じられて以来、先任の研究科長であられる中村裕之教授ならびに市村宏教授のご指導の下、本研究科の運営に尽力してまいりました。

大学院先進予防医学研究科の使命は、予防医学に関わる高度な知識や技能を持ち、医療現場・社会における様々な課題を解決に導くことができる博士人材を輩出することにあります。千葉大学および長崎大学と共同で、オミクス情報からマクロ環境情報まで個人と環境の特性を網羅的に分析・評価し、0次予防から3次予防までを包括した「個別化予防」を実践できる人材の育成を継続して行っており、平成29年に学内共同教育研究施設として設置されました先進予防医学研究センターを研究科と連携する主要な研究拠点と位置づけ、志賀町の住民コホート研究、WHOコラボレーティングセンターによる国際展開などで得られた研究成果を研究科における大学院教育に還元

し、予防医学教育の一層の充実と高度化を図ってまいります。加えて、昨年度採択されました卓越大学院プログラム「ナノ精密医学・理工学」のもと、革新的予防法の創出を担う「技術に強いナノ精密医学プロフェッショナル」や個別化予防を熟知する「ナノ精密理工学プロフェッショナル」人材などの育成・輩出にも積極的に取り組む所存です。さらに、海外大学との連携などによる大学院教育の国際化を一層推進いたします。国費外国人留学生優先配置特別プログラムなどを利用し、外国人留学生を積極的に受け入れるとともに、これまでの交流を活かし、海外大学との単位互換制度やダブルディグリープログラムを推進し、国際共同大学院設置に向けた基盤作りに努めます。

大学院先進予防医学研究科は、医薬保健学総合研究科と不可分の関係にあり、医学系をはじめとする諸先生方のご支援によって始めて成り立ちます。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



杉山 和久

(昭和59年卒業)

世界に冠たる医学系を目指し、 国際的な研究拠点形成を推進し 優れた人材を育成

この度、令和2年4月より医学系長・医学類長に就任した眼科教授の杉山和久でございます。十全同窓会の諸先生方に一言挨拶を申し上げます。

まず、自己紹介をさせていただきます。私は1984年に金沢大学医学部を卒業後、郷里の岐阜

金沢大学医学系長・医学類長に就任

に戻りまして岐阜大学医学部眼科に入局しました。1986年から1年間は静岡県の清水厚生病院眼科、1990年から2年間米国オレゴン州ポートランドのDevers Eye InstituteおよびOregon Health Sciences Universityに留学しました。それ以外はずっと大学勤務でした。1985年から2000年まで緑内障の世界的リーダーであった北澤克明教授に師事して、私も緑内障を専門としております。2002年12月に、母校の金沢大学医学部の眼科教授に就任しました。以後17年間ほど現職を務めており、その間に副病院長を4年間、副医学系長を2年間務めました。今までは眼科学教室の臨床、研究、教育に励んでまいりましたが、今後は眼科に加えて医学系長および医学類長の職務に全身全霊で取り組みたいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、本職を拝命するにあたり考えたこと3つを述べさせていただきます。

①世界に冠たる医学系を目指す

医学系は世界に発信する高水準の研究を目指すしなければなりません。そのためには基礎研究のための環境整備、基礎と臨床の共同研究の推

進のために基礎系と臨床系の教室がさらに連携できる仕組み作り、先進的な臨床研究を推進するための戦略が必要と考えます。

②国際的な研究拠点形成の推進

国際的に評価される拠点形成の推進のために、医学系の卓越した分野を核にして、海外の大学・研究機関との連携、共同研究を推進し、若い医学系医師・研究者の海外派遣を奨励するとともに、海外からのより多くの留学生を受け入れることが重要と思います。

③優れた人材の育成

最近になり国際認証取得のために教育カリキュラムの改革がなされました。これをさらに検証して、学生・教官双方にとってより良いプログラムに改善する努力をしたいと思います。内科の臓器別再編に続いて、本年は外科の臓器別再編が実現します。教育環境の一層の整備と醸成を進めて、国内および国際的な交流、連携を通じて、優れた人材の育成を目指したいと思います。

十全同窓会の諸先生方のご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



蒲田 敏文

(昭和58年卒業)

3つの日本一を掲げ、 環境整備を続けたい

令和2年4月1日より金沢大学附属病院長のⅢ期目(2年任期)を継続することになりました。平成28年4月に病院長に就任した時に掲げた3つの日本一(日本一きれいな病院、日本一職員に優しい病院、日本一患者さんに優しい病院)も

金沢大学附属病院長に再任

今後も目指していこうと思っています。

この2年間の取り組みをご紹介します。まず、病院正面のバス停前の芝生に樹齢300年の“のとキリシマツツジ”(能登町から)と樹齢150年“赤松”を植えました。令和元年5月にはツツジは真っ赤な花を咲かせました。ツツジと松は患者さんや職員の皆さんから大変好評です。今年も5月になれば昨年と同様に病院前を赤く染めてくれると思うと今から楽しみです。開花期間は約20日程度と短いですが、十全同窓会の皆さまには5月の連休中にぜひ附属病院を訪れてみてください。

昨年6月からは病院中央診療棟屋上のヘリポートの運用を開始しました。初めてドクターヘリがヘリポートに着陸する瞬間を、感動を持って見守ることができました。その後、ヘリポートは順調に運用されており、石川県の救急医療にも貢献できているのではないかと思います。また、昨年8月からは、防災ヘリの運用も開始されています。肝移植を必要とす

る小児の国立成育医療センターへの搬送にも利用されました。今後も救急医療のみならず、将来起こりうる災害医療にもヘリポートは活躍してくれると思います。

昨年4月から内科を臓器別に再編し、一つの内科として診療を開始しました。長らく続いたナンバー内科を廃止することには不安もありましたが、内科の先生方、関連病院の先生方のご協力を得て無事スタートすることができました。実際内科の紹介患者数が増加し、病院経営にとってとてもいい影響がでています。いよいよ本年4月からは外科が臓器別に再編され、一つの外科としてスタートします。内科と同様に成果が期待されます。

病院長Ⅲ期目もこれまでと同様に職員、患者さんにとって優しい大学病院になるように環境整備を続けて行きたいと思っています。十全同窓会の諸先生方にはご支援賜りますようお願い申し上げます。

名簿改訂作業延期のお知らせ

十全同窓会名簿改訂事業につきましては、編集委員会にて順次準備を進めてまいりました。現段階で今後の感染拡大防止とその医療活動に努める十全同窓会会員各位の状況を鑑み、延期は余儀ないものと判断し、1年後の再開といたします。

何卒ご理解を賜り、再開の際には変わらずご協力くださいますようお願い申し上げます。

十全同窓会会長 中村 信一
名簿編集委員長 土屋 弘行

就任挨拶



高村 博之 博士

(平成2年卒業)

北陸の高度な消化器外科診療の一翼を担えるよう成長したい

この度、金沢医科大学一般・消化器外科の講座主任を拝命いたしました高村です。初代教授から5代目となる小生ま

金沢医科大学一般・消化器外科学教授に就任

で一貫して金沢大学旧第二外科同門会出身者がその職を務めてまいりました。私も平成2年に金沢大学を卒業後、直ちに故宮崎逸夫先生が主宰する旧第二外科に入局いたしました。大学院修了後、藤田秀春先生や八木雅夫先生の下で消化器外科医としての研鑽を積んだ後に母校へ帰学し、三輪晃一先生の下で肝胆膵・移植医療に携わるようになりました。清水康一先生と谷卓先生の下で肝胆膵・移植外科医としてのイロハを徹底的に叩き込まれ、大きく成長させていただきました。その間、救急部・集中治療部にも席をいただき、柴田恵三先生や谷口巧教授の下で高度救急・集中治療の神髄を味わえたことが、その後の糧となっております。また、再生分子医学講座で横田崇名誉教授や順天堂大学に移られた小出寛教授の下でES細胞とがん細胞の相同性の研究

にも従事させていただき、基礎医学の奥深さを体得できたことは知的財産となっております。太田哲生先生の下で「医学の既成概念へ挑戦せよ」や「一隅を照らす人間であれ」との薫陶を受け、本学の高島茂樹理事長と小坂健夫先生の計らいで2019年4月に本学に異動いたしました。本学には金沢大学出身の多士済々の叡智が結集しております。私立大学ならではのフットワークの軽さと科の垣根のないone teamな雰囲気新鮮さを感じ、また形成外科、頭頸部外科や小児外科の医療水準の高さに圧倒され、自らが担える医療の可能性の広がり胸躍らせております。北陸の高度な消化器外科診療の一翼を担えるように若き教員とともに成長していければと願っております。



赤木 紀之 博士

(特別会員)

理系3学部を経験を積み上げ、自己研鑽に努めたい

令和2年4月1日付けで福岡工業大学工学部生命環境化学科の教授を拝命いたしましたので、謹んで報告させていただきます。

福岡工業大学工学部生命環境化学科教授に就任

きます。私は平成10年に横浜市立大学文理学部を卒業、平成12年に同大学院修士課程、平成16年に東京大学大学院医学系研究科博士課程を修了致しました。平成16年から1年間、本学医学部再生分子医学(横田崇教授)の博士研究員として勤務後、平成17年から約3年半、アメリカ・ロサンゼルスに渡り、シーダス・サイナイ医療センターの血液学腫瘍学部門で研鑽を積みしました。平成20年からは再び本学医学部再生分子医学の助教に着任し、平成27年に同准教授に着任いたしました。

これまで、細胞の増殖や分化の分子機構に強い関心を持ち、多能性幹細胞の自己複製能やがん細胞の遺伝子異常の解析、血液細胞の分化機構の解明に取り組んで参りました。また、メディカル・リサーチ・トレーニング(MRT)プログラムの

担当教員として、教育活動をお手伝いさせていただき、医学類生の研究心の育成に取り組んで参りました。

この度、福岡工業大学に着任することで、私は理学部、医学部、工学部の理系3学部で経験を積むことになります。これまでとは違った新しい景色が見えてくるのではないかと、期待に胸を膨らませております。一方で、10年間にわたりお世話になった金沢大学を離れるのは非常に残念で寂しいですが、お世話になった金沢大学教職員・学生・関係者の皆さまへ恩返しができるよう、引き続き自己研鑽に努めたいと思います。最後に金沢大学医学系と十全同窓会の益々のご発展をお祈り申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

退職のご挨拶



医薬保健研究域医学系
救急医学(循環救急蘇生科学)

稲葉 英夫

この度、令和2年3月末を持ちまして、救急医学(循環救急蘇生科学)主任教授を退任となります。十全同窓会の皆さまにはこれまで長きにわたり、ご指導・ご鞭撻をいただき、深く感謝いたします。

私は、昭和30年1月16日に開業医である父と薬剤師の母の間に横浜市で生まれました。中学・高校は横浜市の聖光学院で学びました。聖光学院の先輩には、オフコースのメンバーの小田和正、鈴木康博、地主道夫さんがおり、卒業後の彼らの生演奏を学園祭等で聞くことができました。メンバーはすべて優秀で、小田・地主さんは東北大学建築学科に、鈴木さんは東工大に入学しています。私は開業医の父の影響で、医学部を目指し千葉大学医学部に入学しました。後で聞いた話ですが、小田さんは千葉大学医学部の入学も考えていましたが、見学に行った時の消毒薬の臭いに耐えられず、受験をやめたそうです。

私は学生時代に山中湖・富士山の救護所活動に参加、救急医療に興味を持つようになりました。行きつけの食堂のおばさんの軽微な麻痺に気づき、救急車で脳血管障害専門病院に運んだこともありました。1979年の卒業後は、千葉県に新設される救急医療センターへの派遣を条件に千葉大学麻酔科に入局しました。救急センターでの研鑽を経て、昭和58年千葉大学救急部・集中治療部の助手となり、同部での臨床研究、シカゴ・ロヨラ大学での基礎研究にも携わりました。千葉大学でのosmolality gapに関する臨床研究がLancet誌に掲載され、この論文で学位を取得しました。この研究には、金沢大学から千葉大学医学部第2生理学教授に就任されていた本田教授(十全同窓会物故会員)の助けもいただきました。留学からの帰国後は、麻酔科講師として後進の臨床研究・基礎実験指導を行いました。救急医学講座の新設が全国的に始まった頃から、救急医学へ意欲が再燃し、1995年、40歳にして秋田大学救急医学講座教授に就任し、救急部の立ち上げと重症救

急患者の集中治療を含めた救命救急センター機能を確立しました。

2000年に、金沢大学医学部救急医学講座教授に就任しました。金沢大学医学部附属病院救急部・集中治療部部長、救命センター長として臨床的に活動させていただきました。最近の10年間は、学部学生・大学院生の教育、救急医学・重症患者管理学・病院前救急医療システムの研究に努め、大学院教育と地域の病院前救急医療システムの構築・発展に貢献することができました。学術研究面においては、救急医学・蘇生科学・重症患者管理学を専門分野とし、特に蘇生科学、病院前救急医療システムとメディカルコントロールの研究において、院外心停止や重症救急患者の予後に関連する因子の同定とその改善策の導入効果の面に力を入れました。医師以外の看護師、救急救命士を大学院生として受け入れ、学位取得者の一部は大学の教授(学科長)・准教授として活躍しています。医学学生教育面においては、系統講義・臨床実習・シミュレーション実習を行う等、学生・院生の教育に尽力し、多くの救急医学に精通した人材を輩出することができました。また、卒後医師の救急医療研修・教育を組織化して、多くの救急専門医を育成しました。災害医療チームDMATとして、多くの災害医療支援にも貢献してきました。2005年から2020年まで、石川県MC協議会会長として、石川県内の救急隊員の活動内容の充実のための教育・研修に力を入れ、石川県の院外心停止患者の1カ月生存を日本のトップレベルに高めることができました。このような社会活動が総務省から認められ、令和元年救急功労者総務大臣賞を2020年9月9日に受賞することができました。

やりたいことはたくさんあったのですが、目標を定められた最後の10年間は充実した日々を送ることができました。十全同窓会の皆さまに改めて感謝してご挨拶といたします。

退職のご挨拶



医薬保健研究域医学系
消化器・腫瘍・再生外科学

太田 哲生

この度、令和2年3月31日を持ちまして、金沢大学を定年退職することとなりました。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、長年にわたりご支援・ご協力を賜りましたことを心より感謝申し上げます。

私は、昭和29年11月18日に石川県珠洲市に生まれ、石川県立飯田高校を卒業後、昭和48年4月に金沢大学医学部に入学しました。そして昭和54年3月に金沢大学医学部を卒業後に宮崎逸夫教授が主宰されていた第二外科学教室に入局し、そこで消化器疾患のなかでも主に肝胆膵領域の難治癌の外科的治療に従事し、肝胆膵外科医として多くの研鑽を積んで参りました。宮崎教授の退任後は、三輪晃一教授のご指導のもとで「膵頭部がんに対する上腸間膜血管を含む膵頭一括切除」という解剖学的基盤に基づいた画期的な根治手術の開発に携わることができました。もちろん、この術式は三輪教授ご自身が考案されたもので、とても斬新で根治性の高い膵がん手術として国内・外の学会で高く評価されました。また、膵癌の分子生物学的な基礎的研究にも取り組み、膵癌間質内の微小環境が作り出す“弱酸性環境状態”・“免疫逃避状態”・“抗癌剤抵抗性状態”に着目し、これら癌微小環境の再構築誘導に向けた新規膵癌治療法の研究にも携わってきました。そして、平成18年4月からは三輪教授の後任として第7代第二外科学教室の教授に就任しました。

教授就任後は、第二外科学教室の伝統である「癌治療におけるリンパ節郭清に対する飽くなき挑戦と探求の心」を継承しながら、三輪教授から受け継いだ過不足のない消化器がん根治手術を信条にして多くの手術指導をして参りました。また、「Unmet medical needsに目を向けた外科医の挑戦」として、周術期難治性合併症に対する革新的治療法の開発にも取り組んできました。なかでも、①腸管粘膜バリア機能低下に起因する肝類洞内好中球細胞外トラップ形成と血管外血小板凝集の研究、②移植関連難治性合併症である肝中心静脈閉塞症・血栓性微小血管症と肝Disse腔内血管外血小板凝集の研究、

③肺動脈性肺高血圧症と肺胞壁内血管外血小板凝集の研究については、「目から鱗の研究成果」が多く得られて欧文誌に発表しました。そして、その研究成果に基づいた数々の先制医療を行うことで難治性合併症の発生頻度が激減し、術後患者の早く元気で素敵な笑顔が見られるようになりました。

一方、附属病院においては、平成20年4月から病院長の富田勝郎先生のもとで「診療担当」の副病院長を2年間、「広報・地域医療連携担当」の副病院長を4年間、計6年間にわたり附属病院執行部の一員として病院運営に携わって参りました。この間、本病院と県医師会や県行政等との連携をより強固なものにするため、石川県医師会の副会長(2年間)、金大病院CPDセンター長、一般社団法人石川県地域医療支援センター理事の役職にも就いて、附属病院の発展のために微力ながら尽力して参りました。

このように、第7代第二外科学教室の教授として14年間にわたって教室を主宰させていただきましたが、私の退任後には100年近く続いたナンバー外科としての教室運営が撤廃され、令和2年4月からは竹村教授を中心に心臓血管外科・呼吸器外科・胃腸外科・肝胆膵移植外科の4つの診療科に新しく小児外科と乳腺外科が加わり、この6診療科からなる臓器別の新しい外科学教室がスタートします。この6診療科のスタッフが力を合わせ、one surgical teamとして北陸医療圏の外科診療を牽引しながら、令和の時代と共に飛躍的な発展を遂げていくことを願って已みません。どうか、十全同窓会会員の皆様方におかれましても、今後の新しい外科学教室の発展を暖かく見守っていただきますようお願い申し上げます。

最後となりますが、十全同窓会会員の皆さま方のご健勝とご活躍、そして金沢大学の益々のご発展を心よりお祈り申し上げるとともに、これまで賜りました第二外科学教室へのご支援とご厚情に深く感謝申し上げます。私の退任の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。



金沢大学医薬保健研究域医学系
血管分子生理学(生理学第一)

多久和 陽

40年を振り返って、私のあゆみにはいくつかの重要な選択がありました。私は1979年に東京大学医学部を卒業し、本郷の東大附属病院で半年ずつ第一・第二・第三内科で研修をした後、第四内科の新任教授尾形悦郎先生の評判を聞き、最後の4期目は第四内科で研修することにしました。尾形先生は教育熱心で大変にinspiringな先生で、私は研修終了後に第四内科に入局し、尾形先生のもとで内分泌学を勉強しました。診療で大忙しの毎日でしたが、教室の談論風発の雰囲気の中、徐々に研究にも興味が湧き、生体内情報伝達に対するあくなき興味がその後の研究テーマとなりました。そして、尾形先生自身が留学されたラスムッセン教授が米国から来日された折に、尾形先生が私と家内と一緒に留学できるように紹介してくださり、私のこれまでの研究者人生が決定づけられました。

1985年1月から、コネチカット州ニューヘブンのエール大学ラスムッセン研究室に留学しました。ラスムッセン教授は Ca^{2+} がcAMPとならぶホルモン作用の細胞内セカンドメッセンジャーであることをいち早く提唱しており(Science 170, 404-412, 1970)、私は当時明らかでなかった平滑筋収縮におけるイノシトールリン脂質代謝回転とカルシウムシグナルの解明に取り組むことになりました。その結果、平滑筋収縮を惹起するアゴニスト刺激がホスホリパーゼCを活性化し、イノシトール3リン酸(IP_3)とジアシルグリセロール(DAG)の2つのセカンドメッセンジャーの産生、二相性の細胞内 Ca^{2+} 濃度上昇、 Ca^{2+} ・Cキナーゼ依存

的なタンパクリン酸化と共役することを明らかにしました。ラスムッセン教授は、プロジェクトを決めた後はしばらく何も言わずに私たちがどうするかじっと見ている“放し飼い”のスタイルで、一年たつてようやくデータが始めると、毎日のように実験室に現れては議論の相手になり、私たち自身で考えるように促してくれるたいへん愉快な方でした。

1987年9月、思い出深きニューヘブンをあとにし、東大に復職しました。留学中から尾形教授の前任校の筑波大学代謝内分泌内科山下亀次郎教授から筑波大にこないかと強く誘っていただいております、研究環境がよいと聞いていた筑波大学に思い切って移りました。ちょうどその頃、筑波大では薬理学の真崎知生教授グループが新規血管作動ペプチドのエンドセリンを発見したばかりで、私は真崎教授グループの方々と盛んに共同研究をさせていただき、エンドセリン作用機構の解明、エンドセリン受容体の同定、エンドセリンの血管外作用の発見などの成果をあげることができました。

1991年7月、東大医学部に設置された寄附講座脈管病態生理学に赴任しました。この寄附講座は基礎医学研究棟の一角にあり、留学以来の朝から夜まで研究三昧の毎日が再開しました。新しいことにチャレンジしようと考え、血管平滑筋cDNAライブラリーから新規G蛋白共役型受容体をいくつかクローニングし、新規脂質メディエーターとして当時注目され始めていたスフィンゴシン-1-リン酸(S1P)受容体や新規プリン受容体を見出しました。もう一つの大きな成果は、平滑筋収縮に低分子量GタンパクRhoが関わっていることの発見です。Rhoがミオシン脱リン酸化酵素を抑制することによりミオシンのリン酸化レベルを上昇させ、この機序により、同じ細胞内 Ca^{2+} 濃度において収縮を増強することを発見しました。その他、機械力受容機構、血管狭窄におけるPDGFの関与などの成果をあげることができました。

1999年厳冬の1月、金沢大学医学部生理学第一講座教授に着任しました。金沢大学では生理活性脂質 S1P の研究を進展させ、3種類の受容体サブタイプ S1P_1 、 S1P_2 、 S1P_3 を同定してこれらの受容体が異なる情報伝達機能を有すること、さらに S1P の受容体や合成酵素の遺伝子改変マウスの研究により、 S1P_2 受容体の腫瘍血管新生阻害作用、血管内皮障壁防御作用や S1P

合成酵素の動脈硬化抑制作用などを解明しました。また、平滑筋Rho研究を進展させ、細胞内 Ca^{2+} 濃度上昇によってRho活性化が引き起こされる新機構の存在を明らかにしました。さらに、この Ca^{2+} によるRho活性化に当時その機能が不明であったII型 PI3 -キナーゼ($\text{C2}\alpha$)が関与することを発見し、 PI3 -キナーゼ $\text{C2}\alpha$ のノックアウトマウスが胎生致死であったことから解析を進めた結果、 PI3 -キナーゼ $\text{C2}\alpha$ がエンドサイトーシスという細胞の基本機能に必要であることを明らかにしました。

管理・運営面では、医学類長(2014年4月～2018年3月)・医学系長(2016年4月～2018年3月)を併任させていただき、この間、副系長・副学類長をはじめ先生方とともに、(1)学修目標とコンピテンシーを再検討し医学類教育理念、学修到達目標として掲げたこと、(2)これに基づいたカリキュラム改革、特に医学入門科目(「プロフェッショナリズム」や「社会科学・行動科学」等)の新設、1年次のチュートリアル授業導入、基礎医学21科目・臨床医学28科目の前倒し(4年次7月までに終了)、72週の臨床実習(4年次12月～6年次6月)、(3)新しい学修到達度評価の導入(統合臨床試験、ポスト・クリニカルクラークシップOSCE)、(4)研究者育成(MRT)プログラム、(5)カリ委員会、カリ検討委員会の設置による教育改善システムの構築、(6)学生に配布する「医学類履修・学生生活の手引き」の大幅な刷新、(7)学習施設の整備・拡充(シミュレーション・センター [スキルスラボ]、チュートリアル・ルーム、自習室)、(8)医学教育改革をになう専門部署としての医学教育研究センターの本格的活動開始、(9)内科系研究分野臓器別再編成への着手、(10)基礎系研究分野定員運用制度改革、(11)入試改革(面接評価の改革、理系一括入試への参加など)などのさまざまな改革に取り組ませていただきました。関係者の皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。

私がこれまで研究、教育に邁進できましたのは、多くの優秀な教室メンバーや共同研究者に負うところが大きかったと思います。皆さまに深甚なる感謝の意を表したいと思います。研究、教育の場を与えていただいた金沢大学医薬保健研究域医学系にお礼を申し上げるとともに、金沢大学医学系ならびに十全同窓会のご発展を願ってやみません。

退職のご挨拶



医薬保健研究域医学系
皮膚分子病態学

竹原 和彦

金沢大学皮膚科学教室(現皮膚分子病態学)の教授を1994年11月に拝命し、2020年3月に至るまで、25年5カ月にわたって勤務させていただきました。

専門は膠原病、特に強皮症および皮膚筋炎、およびアトピー性皮膚炎です。

強皮症は比較的希少な難病で専門医が少ないことより、日本各地はおろか海外(アメリカ、イギリス、ロシア、キルギス、マレーシア、中国)からも患者さんが集まってきました。共同で診療する(診察医が毎回交代する)膠原病外来や、膠原病ホットライン(緊急時の連絡先として私も含めて数人の携帯番号を教える)、自己抗体の測定を教室研究室内で免疫沈降法を行うなどが私たちの特徴です。強皮症の治療法としては、シルデナフィルの肺動脈圧性肺高血圧症やボセンタンの皮膚潰瘍予防などの開発に貢献してきました。

皮膚筋炎においては、悪性腫瘍合併皮膚筋炎の特異抗体である抗TIF1抗体を見出し、現在では保険適応となっています。また抗MDA5抗体陽性皮膚筋炎は急速進行性肺炎をともなって大変予後が悪い疾患であることが知られていますが(5年生存率50%)、我々は22例を経験し、全例生存させています。

アトピー性皮膚炎については、2000年から2012年まで日本皮膚科学会の理事としてアトピービジネスと戦ってきました。私は1990年前後に日本のアトピー性皮膚炎診療の背景にアトピービジ

ネスなる社会悪が存在することに気づき、アトピービジネスを「アトピー性皮膚炎患者を対象とし、医療保険診療外の行為によってアトピー性皮膚炎の治療に関与し、営利を追及する経済活動」と定義し、日本皮膚科学会の委員会委員長やアトピー性皮膚炎問題担当理事として、アトピー性皮膚炎治療の混乱の解消に向けてアトピービジネス問題に取り組みました。その結果として、わが国のアトピービジネスはかなり下火になりました。この間、実際の診療においては常時約千人、トータル数万人の主治医を勤めてきました。

また金沢大学の診療において形成外科が欠けていることに気づき、2014年より皮膚科内に形成外科を誘致し、2017年には診療科独立を果たしています。今後、講座独立に向けて邁進してもらおう所存です。

25年間の入局者は111名、専門医取得者55名、学位取得者46名(大学院在学者8名)、海外留学生受け入れ8名です。また、他大学の教授を3名輩出しています。佐藤伸一先生(長崎大学⇒東京大学)、長谷川稔先生(福井大学)、藤本学先生(筑波大学⇒大阪大学)の3名です。

最後に2013年に当教室は創立100周年を迎え、金沢日航ホテルにて盛大な祝宴を執り行うことができました。

金沢大学十全同窓会の皆さまには、任期いっぱい大過なく終了するに当たって、多大なるご支援と応援をいただいたことを深謝します。

お知らせ

令和2年3月2日(月)開催予定であった教授退職記念講演会、

令和2年3月22日(日)開催予定であった謝恩会は

新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて延期、および中止となりました。

尚、学位記伝達式につきましても令和2年3月22日(日)に、

規模を縮小し、代表者のみの出席で金沢大学自然科学講義棟にて挙行了しました。

令和2年4月3日予定された入学宣誓式につきましても中止となりました。

ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム

文部科学省の公募事業「卓越大学院プログラム」に採択

プログラムコーディネーター 華山 力成

この度、文部科学省の公募事業「卓越大学院プログラム」に、本学から申請した「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」が採択されましたので、ご報告申し上げます。「卓越大学院プログラム」とは、『各大学が自身の強みを核に、これまでの大学院改革の成果を生かし、国内外の大学・研究機関・民間企業等と組織的な連携を行いつつ、世界最高水準の教育力・研究力を結集した5年一貫の博士課程学位プログラムを構築することで、あらゆるセクターを牽引する卓越した博士人材を育成するとともに、人材育成・交流及び新たな共同研究の創出が持続的に展開される卓越した拠点を形成する取組を推進する事業』(文部科学省)です。

本事業は、平成13年に打ち出された「大学の構造改革の方針」(いわゆる遠山プラン)に基づき措置された大学院拠点形成事業(21世紀COEプログラム、グローバルCOEプログラム、博士課程教育リーディングプログラムと続く)の最新版であり、平成30年度より公募が開始されております。令和元年度は、全国の国公私立29大学から44件の申請があり、本学を含む9大学11件のプログラムが採択され、今後7年間にわたり文部科学省の手厚い補助支援を受けつつ事業展開をしてまいります。

これまでの大学院拠点形成事業により、博士人材の数は飛躍的な増加を遂げましたが、昨今では、大学の強み・特色を活かした人材育成が上手くできていない状況や、大学院教育と社会・企業の求める期待との間にギャップがある状況などが指摘され、これらの問題に起因するキャリアパスの不透明さが、学生の「博士離れ」へとつながる深刻な事態となっております。これは我が国の研究力の低下、更には国際競争力の低下につながる重大な問題と認識されております。本事業では、これらの課題を解決するパイロット

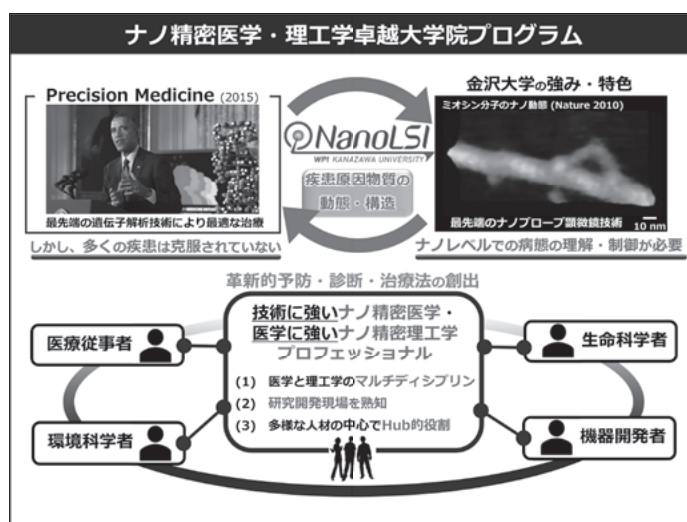
プログラムとして、既存の研究科の枠を超え、複数の民間企業・海外大学にも参画いただく新たな大学院教育を構築することで、本事業の成果を大学全体の教育改革へと普及させてゆくことが期待されています。

次に、「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」で育成する人材像について説明いたします。2015年にアメリカのオバマ大統領から“Precision Medicine”が提案され、現在世界的に注目されています。これは、最先端の遺伝子解析技術などにより患者個人レベルでの最適な治療を目指すもので、「精密医学」と和訳されております。しかし、このような技術をもってしても、がんや認知症など多くの疾患は未だ十分には克服されてはおりません。私たちはその原因の1つは、疾患原因物質の動態や構造がナノレベルで解明されていないためであると考えております。この点に関して、2017年に世界トップレベル研究拠点(WPI)として本学に設立されたナノ生命科学研究所(NanoLSI)では、最先端のナノプローブ顕微鏡技術を用いることで、ナノレベルでの病態の理解・制御に関して世界を先導する研究成果を多数挙げております。そこで、本プログラムでは、この卓越し

た強み・特色を活用することで精密医学をナノレベルにまで掘り下げ、革新的予防・診断・治療法の創出を担う「技術に強いナノ精密医学・理工学プロフェッショナル・医学に強いナノ精密理工学プロフェッショナル」を育成してゆきます。

より具体的には、医学と理工学の双方の言葉が分かり、異分野の研究開発現場を熟知し、かつ多様な人材の中心でHub的役割を担うことのできる高度な「知のプロフェッショナル」の育成を目指します。

特に、ターゲットを人類社会の課題である「がん、生活習慣病、脳神経病、微小粒子・ナノ材料による疾患」の5つに絞り、ナノ生命科学研究所の卓越した研究環境・実績の下、医薬保健学総合研究科・先進予防医学研究科・自然科学研究科・新学術創成研究科の理系4研究科が一丸となることで、ナノレベルでの理解・制御による革新的予防・診断・治療法の創出を担い、Society5.0の実現に欠かせない人類の健康基盤構築のためのイノベーションを起こしうる人材を育成してゆきます。これらの取組みにより、世界の学術を牽引する卓越した研究者や、知の社会実装を主導する起業家、イノベーションをリードする企業人、国内外のパブリック・セクターにおいて政策立案をリードする人材など、俯瞰力・独創力並びに高度な専門性を備え、大学や研究機関、民間企業、公的機関等のそれぞれのセクターを牽引する卓越した博士人材を金沢大学から輩出してまいります。



松原藤継名誉教授を偲んで

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 腎臓内科学 和田 隆志
金沢大学大学院先進予防医学研究科 腎病態統御学

慈愛と徳に満ちた 松原先生の志は 教室に受け継がれる

金沢大学医学部臨床検査医学教室の初代教授であります松原藤継先生におかれましては、令和2年2月1日に享年94歳でご逝去されました。

松原藤継先生は大正14年9月に金沢市でお生まれになり、昭和20年3月に第四高等学校理科乙類、昭和24年3月前身の金沢医科大学を卒業されました。翌年6月に第三病理学(寄生虫学)助手となられたのち、昭和33年9月から34年11月病理学のご研究のため米国に渡られました。ご帰国後、昭和36年4月から金沢大学医学部附属病院検査部講師、昭和44年8月から助教授を経て、昭和47年10月金沢大学医学部附属病院検査部教授(同検査部長併任)に就任されました。この間、新設された金沢大学医学部附属衛生検査技師学校校長を昭和46年4月から48年3月までおつとめになり、医療技術短期大学部の設置への橋渡しを担当されました。さらに、昭和61年4月、医学部への臨床検査医学講座の設置に伴い初代教授に就任されました。昭和62年5月から附属病院病理部初代部長も併任されました。まさに、金沢大学医学部の発展、組織改編に伴い、先頭に立って卓越したリーダーシップをいかんなく発揮されました。私自身、昭和61年に5年生として臨床検査医学の臨床実習を1期生として受けさせていただきました。松原先生に薫陶を受けたことを改めて感謝し、先生とのご縁も深く感じております。さらに、昭和63年から平成2年にかけて十全同窓会理事長、平成7年から11年にかけて同会長の要職をおつとめになりました。この間、医学部の学術振興に加えて、十全講堂や医学部記念館の改修といった宝町キャンパス整備にも大変尽力されました。

松原先生は甲状腺疾患の臨床病理学的研究、甲状腺腫瘍の外科病理学的および

臨床細胞学的研究を精力的に行って来られました。甲状腺疾患の臨床病理学的研究では、甲状腺針生検により診断された慢性甲状腺炎(橋本病)の組織亜分類と甲状腺ホルモン濃度との関連を明らかにされました。さらに、疾患時の甲状腺ホルモン合成機序について、甲状腺濾胞細胞のホルモン合成機構とその障害を解明されました。これらの成果を通じて、無痛性甲状腺炎を含む橋本病の臨床病態の解明に多大の貢献をされました。甲状腺腫瘍の外科病理学的および臨床細胞学的研究では、甲状腺濾胞がん、濾胞腺腫との鑑別が困難であった症例を検討し、その病理学的な意義を明らかにしてこられました。甲状腺腫瘍の吸引細胞診と組織診との比較検討の成果とも合わせ、甲状腺腫瘍外科および甲状腺がんの早期診断、治療学の発展に多大な寄与をされました。これらの素晴らしい研究成果は内外で高く評価されました。また、日本臨床病理学会、日本臨床検査自動化学会をはじめ多くの学会で理事、評議員など要職を歴任されました。昭和59年には、金沢にて第31回日本臨床病理学会総会長として学会を開催され、成功裡に終わりました。これらのご業績から、平成17年に瑞寶中綬章の叙勲の栄に浴しておられます。つい最近まで、ご自身で診断された症例に関して、附属病院病理部で長時間に渡り、議論をされていた姿がとても印象的です。学問、臨床に真摯なお姿は我々後進の記憶に深く刻まれています。病院での議論の後、決まってご家族に洋菓子をお土産としてご購入されていました。少し照れた表情をしていらっしゃることもよく覚えております。慈愛に満ちた先生の温かいお人柄が偲ばれます。さらに、90歳を過ぎても学会にお越しになり、最前列にて熱心に聴講されていました。また、最先端の研究内容にもご質問をされているお姿は、学問への真摯な姿勢、志を具現化するものとして鮮烈に記憶しております。

私は平成19年9月に2代目教授の橋本琢磨先生(現名誉教授)の後を引き継ぎ、



松原藤継名誉教授

教室を担当させていただいております。松原先生、橋本先生の志を引き継がせていただけたことは身にあまる光栄と感じております。その後、松原先生にご指導をいただきながら、同門会を立ち上げることができましたことも大変ありがたく、嬉しく思っております。同門会にも毎年欠かさずご出席され、心のこもったご挨拶をいただきました。お会いするたびに、教室の発展を心から願い、応援してくださるお姿に私はじめ後進には大変ありがたく、そして身が引き締まる思いを新たにしておりました。ご多用にも関わらず、検査部の新人歓迎会、忘年会、送別会なども欠かさずご出席をいただきました。先生の周囲には常にご挨拶を交わす方が溢れ、とてもご丁寧に対応をされていました。お会いするたびに先生の慈愛に満ちた眼差しと所作から多くを学ばせていただきました。先生の体温、息吹からはまさに人徳と呼ぶにふさわしいものを感じていました。そして宴席では卒業後に学ばれたという宝生流謡曲鞍馬天狗、山中節など解説を交えて謡をご披露いただいていたいました。もう一度お聴きできないのはとても残念です。

慈愛と徳に満ち、学問への真摯な姿勢を持ち続けておられた松原先生の歩みは、人として、医師・研究者・教育者として、後進の私どもに深い感銘を与え続けております。松原先生のご遺志を受け継ぎ、金沢大学において、教育、研究、診療を一層発展させるように努力を続けたいと願っております。松原先生の長年のご高導に感謝しつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

金 沢 か ら 世 界 へ 発 信

骨 再 生 医 療

地域未来医療整形外科科学講座

林 克 洋

(平成9年卒業)

はじめに

がんの骨転移、骨肉腫などの骨の腫瘍に対する手術では、腫瘍の摘出により骨欠損が生じる。欠損部は金属による人工関節などで骨再建術が行われるが、人工物は生体物質と異なり自己修復能はなく、長期的には破損し再手術となることや、感染に弱いこと、運動など高負荷には耐えられないことなど課題も多い。我々は、人工関節にかわる骨再建に関して、仮骨延長法や人工骨、超音波刺激、BMP(Bone morphogenetic protein)、HGF(Hepatocyte growth factor)などさまざまな研究、臨床応用を行い世界に発信してきた。今回その中でも液体室素処理骨と脂肪由来幹細胞について紹介する。

液体室素処理骨

腫瘍におかされた骨を手術で摘出するが、その腫瘍骨を再利用する方法を開発した。摘出した腫瘍骨を液体室素内で急速冷凍、緩徐に解凍することで、腫瘍細胞を死滅させ、骨構造は温存し再建材料として利用する方法である。金沢大学整形外科の土屋、山本らによって基礎実験から開発をはじめ、臨床応用を行った(JBJS Br 2005, BJJ 2014)。液体室素処理した骨は、骨細胞も腫瘍細胞とともにいったん死滅するが、BMPなどのタンパクは温存され、体内で正常骨として徐々に再生する。そのため、手術直後はしば

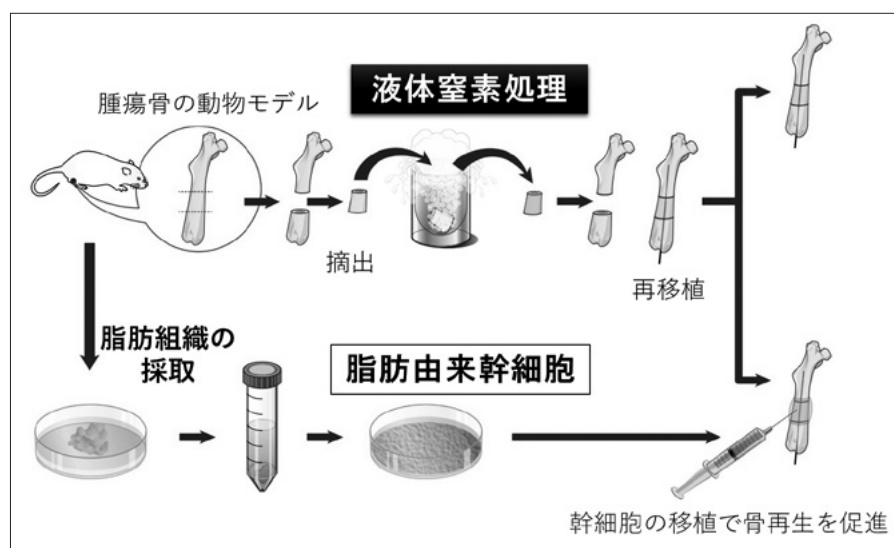
らく安静が必要であるが、最終的に骨強度が回復すると健常人と同等の運動復帰も可能であり、サッカーなどの競技を遜色なく行っている患者も珍しくない。この方法は、液体室素という安価な材料で簡便な手技で行えるのも受け入れられ、アジアや南アメリカなどで広く普及しており、学会や論文でも欧米を含めて各国から報告がみられるようになってきている。

液体室素処理骨の手術は先進医療として金沢大学附属病院で行われてきたが、2020年4月より正式に保険適応となり手術が可能となっている。これまでに発信した英語論文数は38編、海外発表口演134題である。

脂肪由来幹細胞

この液体室素処理骨であるが、長期的に骨再生が起こり正常の骨に置換されるが、個人差はあれ年単位の期間が必要で、それまでは骨強度に応じた負荷のかけ方

となる。骨再生を促進するためにはさまざまな方法が考案されているが、我々は脂肪に含まれる幹細胞に着目して研究を行ってきた。皮下など生体内に豊富にある脂肪の中に多分化能をもつ細胞が含まれ、脂肪由来幹細胞と呼ばれる。比較的簡便に抽出できるため臨床応用もしやすい。今回動物実験にて液体室素処理骨に脂肪由来幹細胞を移植することで、骨再生が促進されることを確認した(J Transl Sci 2019)。また、脂肪由来幹細胞の骨分化能をさまざまな方法で応用している。アスコルビン酸を使用した幹細胞シートによる骨形成や、スフェロイドの複合体による幹細胞構造体などを研究しており、骨欠損に対して幹細胞で直接修復を試みている。現在、骨以外にも関節軟骨や末梢神経、半月板などの再生を脂肪由来幹細胞を用いて幅広く研究を行い、世界に発信している。これまでの英語論文数は12編、海外発表口演19題である。



第2回鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会

日時／令和元年12月26日(木)

場所／ホテル日航金沢

鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞は、本学の前身、第四高等学校に学んだ鈴木大拙と西田幾多郎にちなんで2017年に創設されました。本学医学部ご出身の臼井湍先生(昭和39年卒業)のご篤志が原資となっています。

今回は、遊佐道子米国西ワシントン大学教授が第2回受賞者に選ばれました。遊佐先生は、鈴木大拙と西田幾多郎の研究を通し、インターカルチュラル哲学(inter-cultural philosophy)という独自の研究領域を開拓されました。異文化間、とくに洋の東西にまたがる哲学や宗教の普遍性を明確にされた、著名な哲学者です。

令和元年12月26日午後3時よりホテル日航金沢において、記者会見に続いて授賞式、記念講演会および祝賀会が行われました。授賞式では、山崎光悦学長のご挨拶に続き、臼井先生からご挨拶がありました(写真)、この国際賞創設の趣旨が説明されました。また、若き日の鈴木－西田哲学の書との邂逅が医療法人、学校法人、社会福祉法人の運営の支えになってきた

こともお話しくださいました。このあと、山崎学長から遊佐先生に盾、副賞、花鳥図をあしらった加賀友禅の記念品が贈呈されました。

遊佐先生の記念講演の題名は「世界平和・個人の自由：二十一世紀に於ける西田と大拙の思想」でした。鈴木大拙と西田幾多郎の友情、大拙仏教哲学と西田哲学の底流にある平和、自由、個人の尊厳について、石川県の風土、太平洋戦争前後の時代的背景などを交えながらのご紹

介がありました。

当日は第1回受賞者のジラルド フレデリック ルネ ロベール(Girard Frédéric, René, Robert) フランス国立極東学院名誉教授も遠路ご列席され、国際交流に相応しい親睦の場となりました。

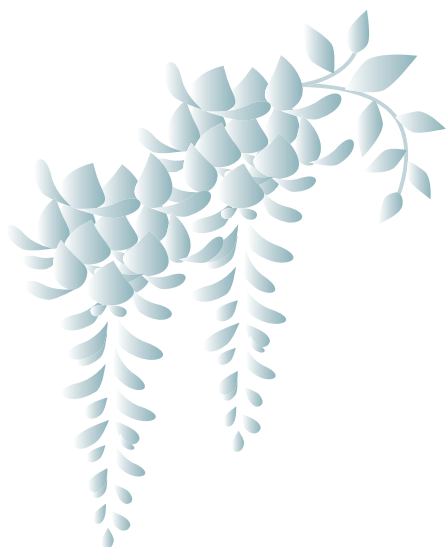
これらの様子は金沢大学ホームページに動画も含めて公開されています。

(<https://www.kanazawa-u.ac.jp/news/75035>)

(横山 茂：記)



遊佐先生(壇上左)と臼井先生(中央)



医師国家試験結果

厚生労働省が2020年3月16日に発表した第114回医師国家試験の合格状況を報告します。全体の受験者数10,140名、合格者9,341名で合格率は92.1%（新卒者94.9%、既卒者69.2%）でした。この合格率は2011年からの10年間で最も高い値でした。ところで、金沢大学医学類では総数として126名が受験し、118名が合格で合格率93.7%（新卒者94.2%、既卒者80.0%）で、全国平均を上回りました。しかし、一昨年度第113回医師国家試験の本学の合格率95.5%（新卒者96.2%、既卒者83.3%）を若干ですが下回る結果となりました。単純に比較することはできないのですが、昨年度の第114回医師国家試験の受験に当たっては、多くの留年経験者が新卒者の中に含まれておりましたので、十分健闘したと捉えることもできるかもしれません（留年経験のない新卒者合格率97.2%）。今年度はより一層の教職員、学生諸君の奮起に期待したいと思います。

現在、卒業試験として6年次秋に統合臨床試験を2回行い、Post-CC OSCEの合格、選択臨床実習（クリニカルクラッシュ）の評価、総括講義などと合わせて卒業判定をしております。昔のような各臨床講座の卒業試験は実施しておりません。この統合臨床試験に移行してから、国家試験の合格率は上がってきておりますが、金沢大学医学類医王保護者会の手厚いサポートや、これにプラスして学生支援委員長、教育委員長、医学教育研究センターのスタッフはじめ教職員が

一丸となって、学生へのきめ細かい対応をしてきた結果と思います。特にボーダーラインで合格・不合格の間にいる学生への支援、教育は重要と思います。

いよいよ昨年度から国際基準による医学教育分野別評価（国際認証）の取得を目指した拡大された診療参加型臨床実習も始まりました（コロナウイルスの影響で少し遅れていますが）。引き続き、医学類の教育理念、教育目標に沿った医師の育成に邁進したいと思います。

（杉山 和久：記）

第114回医師国家試験結果 ※（ ）内は第113回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
令和2年3月 卒業者	121名 (106名)	114名 (102名)	7名	94.2% (96.2%)	94.9% (92.4%)
平成31年3月 以前の卒業者	5名 (6名)	4名 (5名)	1名	80.0% (83.3%)	69.2% (56.8%)
合 計	126名 (112名)	118名 (107名)	8名	93.7% (95.5%)	92.1% (89.0%)

新型コロナウイルス感染症に負けずに！

全世界に新型コロナウイルス感染症が蔓延しています。金沢大学附属病院は石川県の感染症指定医療機関ではないため、当初は本感染症患者の医療を指定医療機関である金沢市立病院、石川県立中央病院にお任せしていました。しかし、石川県内の患者急増に伴い、附属病院も重症患者を受け入れ、現在医療チームが奮闘している状況です。神経科精神科患者のための北病棟を病棟本体と切り離すことで、本感染症患者専用の病棟として使用しています。本院の担当スタッフは、フェイスシールド、ガウン、マスク、グローブ等々で完全武装してことにあたってくれていますが、全国の例にもれず、これらの資材の供給と払い出しバランスがぎりぎりのところで運営されています。同窓会諸先生が勤務される病院においても、これと同様な措置のもとに本感染症の診療にあたっておられることと想像します。開業諸先生の診療所・病院にも、本感染症疑いの患者が診察に訪れ、診療に腐心されておられることと拝察します。

4月21日に附属病院長から出された学内向けの資材提供要請が、同窓会事務局から各支部会に転送されましたが、それに対する各支部長の先生方からの返信にも、苦勞されておられることが垣間見られます。この要請に対して、山梨支部長 田邊 讓二先生が地場企業と交渉していただき、多くの資材を大学に送っていただきました。この場をお借りし、同窓会を代表して感謝申し上げます。

現在、物資不足もさることながら、PCR検査、抗体検査、抗原検査が保険診療の中で十分に実施できない状態です。しかし、医療従事者が根を上げれば、その先は闇となります。これからが踏ん張り時かと思います。この記事が皆様の目にとまる5月末には、緊急事態宣言の効果がでて患者数減少傾向にあることを願っていますが、収束に向けて一層の敢闘が当分求められることと思います。同窓会の皆様におかれましては、各々の貢献の仕方を持って、地域住民の方々のため、あるいは全国の方々のためにご尽力くださいますようお願い申し上げます。

（会報編集委員長 絹谷 清剛）



内灘海水浴場で開催される「世界の凧フェスティバル」

金沢医科大学に現職として在籍される方々の学術内容を第2回として、基礎系および外科系・内科系から原稿とお写真をお寄せいただいた23名の方を講座別に順不同で前回(第1回)からの通し番号で掲載いたします。

20. 上田 善道 主任教授

(昭和56年卒業)

医学部・病理学Ⅱ



卒業後、私は天理よろづ相談所病院でジュニアレジデントとして臨床を学び、その後シニアレジデントと病理医として8年間外科病理を学びました。若いときに第一線の病院で学んだ臨床に直結した外科病理学をもとに、金沢医科大学、恵寿総合病院、金沢済生会病院をはじめ、アルプ病理を通じ石川県の多くの施設の病理診断に関わらせていただいています。一般病理のほか、血液・リンパ球系腫瘍と非腫瘍性肺疾患の病理を専門としています。問題症例があれば遠慮無く相談ください。金沢医科大学では多くの十全同窓会会員のご子弟の教育も担当させていただいています。残り時間も少なくなりましたが、研究面でも若手の指導を積極的に行っていきたいと考えています。

21. 米倉 秀人 主任教授

(会員Ⅱ)

医学部・生化学Ⅱ



1996年に金沢大学医学部生化学第二講座(山本博教授)に助教授として着任しました。大学院化により講座名は血管分子生物学研究部門となり、准教授として2006年まで在籍しました。その間、2004年にフィンランド・ヘルシンキ大学にて文部科学省在外研究員として研究を行いました。金沢大学在籍中は、(1)advanced glycation endproducts (AGE)の受容体であるRAGE (receptor for AGE)の機能およびその遺伝子発現・mRNAスプライシングの調節機構、(2)血管新生の調節機構について研究を行いました。2006年4月に金沢医科大学生化学Ⅱ教授として着任し、教育では第一学年と第二学年で、生化学・分子生物学についての講義・実



習を担当しています。現在の医学は、分子・遺伝子レベルでの理解が必須となっており、こういった状況に適切に対応できる医師・医学研究者の養成を意識して教育に取り組んでいます。現在の研究テーマは、(1)VEGF受容体の選択的mRNAプロセシングの調節機構、(2)血管と神経の相互作用の分子機構、(3)水晶体の機能維持と病態発生の分子機構です。

22. 佐々木 洋 主任教授

(昭和62年卒業)

医学部・眼科学



卒業後、自治医科大学眼科学教室(清水昊幸教授)に入局しました。9年間の在籍期間中、米国のオークランド大学眼研究所

(Venkat N Reddy教授、Frank Giblin教授)に2年間留学し、水晶体の酸化ストレスと白内障に関する研究を行いました。平成8年に金沢医科大学眼科学教室(佐々木一之教授)に移籍し、平成17年5月から同教室部門教授として水晶体・白内障の基礎および臨床研究、紫外線と眼疾患・放射線白内障に関する疫学研究、眼光学、眼薬理、電磁波による眼障害に関する研究を行っています。令和元年8月には眼科病棟内にアイセンターができ、屈折矯正・老視矯正白内障手術を中心に年間約1700件程度の手術を行っています。水晶体・白内障については、臨床、疫学、基礎研究の全てを網羅した研究体制が整ったので、グローバルに研究成果を発信し、眼科医療の発展に貢献していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

23. 三輪 高喜 主任教授(副学長)

(平成元年大学院修了)

医学部・耳鼻咽喉科学



平成元年に故梅田良三教授の下、嗅神経の再生に関する研究で医学博士を取得、古川仍名誉教授在任時には医局長、准教授

として在職し、2009年に耳鼻咽喉科学主任教授として赴任し10年が経ちました。2015年から金沢医科大学病院副院長を務めた後、2016年から副学長に就任しました。副学長としては、主に学生教育を担当しております。赴任後も嗅覚に関する臨床、基礎研究を続けており、大学院生が嗅神経再生をテーマとする基礎研究で医学博士を取得するとともに、認知症、脳梗塞などと嗅覚との関連で複数の論文もまとまりつつあります。更に新たな嗅覚研究にも着手しています。金沢大学耳鼻咽喉科で生まれ育った嗅覚の研究を接ぎ木として引き継ぎ、10年かけてようやく小さいながら花を咲かせることができました。この花が枯れることなく、更に大樹として育つよう今後も努力してまいります。

24. 志賀 英明 准教授

(平成7年卒業)

医学部・耳鼻咽喉科学



卒業後、直ちに古川仍教授(当時)が主宰されていた金沢大学耳鼻咽喉科学教室に入局しました。2度にわたる米国留学の機

会にも恵まれ頭頸部がん化学療法の予後因子に関する研究で学位を取得しました。平成18年に米国NIHから帰国後は、新たな研究領域に踏み出したいという希望と、古川教授の勧めもあり三輪高喜准教授(当時)の門をたたき、嗅覚研究を開始

しました。平成21年に三輪教授が本学に着任されたのを機に、自身も講師として本学に赴任しました。現在は准教授・医局長として医学部・大学院教育を中心に、医局運営や関連病院との連携にも活躍の場を広げております。嗅覚障害の分子イメージングが専門で、金沢大学核医学教室のご協力も得ながら嗅覚障害の病態研究に邁進しつつ、嗅覚障害の新たな治療法開発を展望しております。

25. 笹川 寿之 主任教授

(昭和58年卒業)

医学部・産科婦人科・生殖周産期医学



私は卒業後、大阪大学産科婦人科に入局し、市立豊中病院、阪大附属病院、阪大微研病院で産婦人科臨床

の経験を積み、阪大微研腫瘍ウイルスにおけるHPV16型動物発がんモデルで博士号を取得しました。その後、英国ケンブリッジ大学病理・腫瘍ウイルスでHPVワクチンの開発に従事しました。1996年から金沢大学附属病院産婦人科助手、保健学科准教授をへて2009年から金沢医科大学産科婦人科の准教授、特任教授をへて2016年から当科の主任教授を拝命しております。当科の教授としては3代目でございます。就任当時6名からスタートしましたが、6名の新人医師の入局があり、やっと臨床教室らしき状況になりました。2年前には同門会も設立いたしました。金大時代はHPV関連の疫学研究や免疫学的研究をしておりましたが、当教室では、それらを応用したがん免疫療法、CIN無血治療など臨床的テーマ中心にした研究を行ってきました。現在は中国人留学生2名、大学院生1名、非常勤研究員1名とともにHPV関連病変の原因HPV型網羅的解析、HPV primary検診などの研究を進めています。

26. 高倉 正博 准教授

(平成5年卒業)

医学部・産科婦人科・生殖周産期医学



卒業後、産科婦人科学教室に入局いたしました。故井上正樹前教授と京哲先生(現島根大学教授)のご指導の下、婦人科

腫瘍医として臨床と発がん機構究明の研究に携わってまいりました。当時の研究テーマだった不死化関連酵素テロメラーゼの繋がりです。平成15年から2年間米国テキサス大サウスウエスタンメディカルセンターに留学する機会もいただきました。平成26年に藤原浩教授が着任されてからは周産期医療にも関わらせていただきました。平成29年に笹川寿之教授のご縁もあって本学に赴任して3年になります。臨床面では関連他科の先生方の協力も得て悪性腫瘍に対する内視鏡手術を徐々に導入しております。研究面では子宮内膜の発がん機構に関する研究とリキッドバイオプシーに関する研究を少しずつ続けております。

27. 小坂 健夫 主任教授

(昭和60年大学院修了)

医学部・一般・消化器外科学



昭和54年に第二外科に入局し、昭和60年大学院を修了しました。第二外科助手として、宮崎逸夫教授、三輪晃一助教授の指

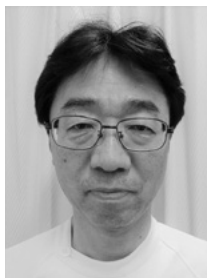
導の下、胃がんを研究しました。平成3年から金沢医科大学一般・消化器外科学に赴任し、高島茂樹教授の下で診療、研究と教育に従事し、平成20年から講座主任教授に昇任し、平成22年から副院長を務めました。専門は胃・大腸がんを中心とした腫瘍外科で、個別化治療を目指した低侵襲治療や機能温存手術、また

治療切除困難な進行がんに対しては、術前治療で腫瘍をダウンステージさせ、根治手術を安全確実に実施しています。「上部消化管」「下部消化管」「肝胆膵」「体壁」のチーム制を導入し、手術が好きな若手医師が集う医局を目標にしています。石川県検診等管理指導協議会胃がん部会長、CATO-OSCE実施小委員会委員等を務め、2018年に第48回胃外科・術後障害研究会を、2019年に第44回日本外科系連合学会を主催し、全国から多くの外科医が集いました。

28. 上田 順彦 臨床教授

(昭和58年卒業)

医学部・一般・消化器外科学



私は卒業後、旧第二外科に入局しました。宮崎逸夫教授、永川宅和教授の下、主として胆膵外科について学ばせてもらいま

した。その後北陸三県、京都北部の関連病院で勤務し、平成21年1月に縁あって当院に赴任させていただきました。小坂健夫教授の元、主として肝胆膵外科、腹部救急疾患を担当させてもらっています。とくに膵がんについては放射線化学療法と手術を組み合わせた集学的治療を行ってきて、徐々にではありますが予後の改善を認めています。一方、腹部救急疾患については外傷や腹膜炎など内因性疾患の診療および研究を行っており、この分野のさらなる治療成績向上に日々奮闘しているところです。

29. 高村 博之 臨床教授

(平成2年卒業)

医学部・一般・消化器外科学



2019年4月に金沢大学肝胆膵移植外科より一般・消化器外科へ着任しました。金沢大学旧第二外科同門の高島茂樹理事長と

小坂健夫教授に新たなチャレンジの場を与えていただき、感謝申し上げます。本学へは以前から手術支援に来ておりましたが、最新鋭の病棟からは白山のみならず立山連峰まで一望でき、対面には日本海の大海原が広がる360度のパノラマにすっかり魅了されております。前任地では肝移植をはじめとした肝胆膵領域の外科治療や門脈圧亢進症の外科治療、後腹膜肉腫などの外科治療に従事しておりました。金沢大学時代と同様の診療を担うとともに、若手スタッフが腹腔鏡手術をはじめとした高度な肝胆膵外科手術を担える消化器外科医に成長できるように尽力する所存です。

30. 木南 伸一 臨床教授

(平成2年卒業)

医学部・一般・消化器外科学／氷見市民病院 一般・消化器外科 科長(併任)



卒業後、旧金沢大学第二外科に入局、同助手を経て、2008年に准教授として金沢医科大学に赴任、2019年

1月に臨床教授に昇進しました。2019年4月からは、金沢医科大学氷見市民病院一般・消化器外科に科長として勤務、本院の臨床教授は併任となりました。本院での臨床研究と手術指導は引き続き執り行っています。消化器外科全般の診療と手術を行っておりますが、研究の専門は胃がん外科、内視鏡治療で、リンパ節転移の病態制御・早

期胃がん機能温存根治手術・蛍光ガイド手術をテーマとしております。腫瘍学ならびに生理学に立脚したオリジナルな外科治療の構築を夢見ており、ようやく実現の一手手前まで到達しました。疾病を制御し生命を救う外科治療の魅力に喜びを感じ、反面、患者に与える影響の深刻さを畏怖しつつ、治療を担当させていただく患者様のご多幸と、研究の継続と完成を希求する毎日です。プライベートでは、相変わらずアニメヲタクです。

31. 藤田 秀人 臨床准教授

(平成4年卒業)

医学部・一般・消化器外科学



卒業後、旧金沢大学二外科に入局しました。大学院の研究テーマは胃がんの基礎研究を行い、平成10年に博士号を取得し

た後、金沢医療センター、富山県立中央病院および金沢赤十字病院での外科修練を経て、平成17年より金沢大学附属病院に勤務し、故・西村元一先生のご指導のもと大腸がんの手術・薬物療法および臨床研究を行ってまいりました。平成24年9月より金沢医科大学病院一般・消化器外科に赴任し、同じく大腸がんを中心とした外科診療に従事しています。現在は、特に大腸がんの腹腔鏡手術とロボット手術に力を注ぎ、次世代の優秀な外科医を育てることを目標としています。

32. 宮田 隆司 講師

(平成30年大学院修了)

医学部・一般・消化器外科学



私は信州大学医学部を卒業後、平成20年より金沢大学で臨床研修を修了、平成22年に金沢大学旧第二外科に入局、そして諸

先輩方から消化器外科学を基礎から親身にご指導いただきました。研究面では薬剤性肝障害である肝類洞閉塞症候群に関して、血管外血小板凝集抑制に伴う肝障害予防と肝再生促進をテーマに学位を取得いたしました。その後は、平成26年より静岡県立静岡がんセンター肝胆膵外科チーフレジデントとして2年間、上坂克彦先生のもとで研鑽を積み、平成30年より現在の金沢医科大学に着任し、肝胆膵外科を中心に教育、診療、研究を行っております。これまでの多くの教えを基に、今後は当教室スタッフと協力し合い、たゆまぬ向上心持ち続け、肝胆膵外科医・消化器外科医として更なる成長と医療に貢献できるよう、尽力する所存です。

33. 飯塚 秀明 主任教授

(昭和55年卒業)

医学部・脳神経外科学



1980年3月金沢大学医学部を卒業、同年4月に金沢医科大学脳神経外科学教室(角家暁教授)に入りました。その後は、角家教授の指導の下で研鑽し、1988年5月から2年間、New York大学脳神経外科学教室に留学しました。1996年2月に助教授、1999年4月から主任教授を担当してまいりました。また、2008年4月から2010年8月まで金沢医科大学病院病院長、2010年9月から2016年8月まで、金沢医科大学副学長を務める貴重な機会をいただきました。これまで、臨床面では、脊髄・末梢神経外科や脳腫瘍の外科手術などを中心に、後進の指導を含めて努めてまいりました。定年まで残りわずかとなりましたが、脳神経外科の治療と教育に全力を注ぎたいと思っております。

34. 立花 修 特任教授

(昭和58年卒業)

医学部・脳神経外科学



卒業後、金沢大学脳神経外科学教室で脳腫瘍および間脳下垂体腫瘍の診療と研究に携わり、平成6年から

はWHO国際がん研究機関で脳腫瘍の研究に従事しました。帰国後、平成16年からは金沢医科大学脳神経外科学教室に赴任し、主に間脳下垂体腫瘍の外科治療に従事してまいりました。本領域は特に内分泌学、小児科学、産婦人科学、放射線科学、病理学の広い範囲の専門分野が密に連携して治療することが必要とされます。本学において、ご紹介いただいた先生を含めました多くの先生方のご協力を経て、十分な連携治療ができましたことに深く感謝申し上げます。また、この間脳下垂体腫瘍治療の考え方を次の世代に伝えるため、学内のみならず、日本間脳下垂体腫瘍学会および日本内分泌学会を通じて深く関わらせていただいています。現在も、間脳下垂体腫瘍の外科治療をおこない、臨床治療研究に携わる日々を送っております。

35. 林 康彦 特任教授

(平成3年卒業)

医学部・脳神経外科学



卒業後、金沢大学脳神経外科に入局、平成8年に大学院博士号を取得してあります。間脳下垂体腫瘍、小児先天奇形、良性

脳腫瘍などの診療に従事しており、とくに神経内視鏡を用いた治療を中心に行っております。この治療法により特に脳深部に存在して到達困難な頭蓋咽頭腫や頭蓋底髄膜腫などの摘出率を上げることができ、それで機能および生命予後を少し

でも延長させるべく技術の向上に努めております。また、小児神経外科分野では、石川県内で唯一の小児神経外科専門医の資格を有しており、水頭症や二分脊椎などの先天性中枢神経系奇形にも尽力しております。特に小児キアリ奇形の病態解析の研究も行なっております。研究面では米国国立衛生研究所留学時からの脳内水チャンネルの機能と役割に関して、脳腫瘍の血管新生および浸潤機構や脳脊髄液の産生機序の解明を進めております。平成31年4月より特任教授として金沢医科大学に着任しており、学生の教育にも尽力していく所存です。

36. 川原 範夫 主任教授(医学部長)

(昭和58年卒業)

医学部・整形外科学



卒業後、直ちに金沢大学整形外科に入局いたしました。1988年に馬場久敏先生(現在福井大学名誉教授)の指導で学位論文を取得いたしました。その後、富田勝郎先生(現在金沢大学名誉教授、金沢先進医学センター理事長)とともに脊椎腫瘍に対する腫瘍脊椎骨全摘術の開発、確立に尽力してまいりました。本手術手

技は2003年には高度先進医療に認められ、2012年には保険点数に収載されました。2010年から金沢医科大学に赴任し、脊椎外科部門の責任者として医学部学生、大学院生の教育、研究指導を行い、2016年には整形外科講座の主任に就任いたしました。教学関係では2013年から学生部長に指名され、学業・学生生活・課外活動の支援室や学校保健室などを通して学生の支援を精力的に行い、2017年には医学部長に就任し、2019年に再任されました。現在は医学教育に奔走するとともに脊椎手術にも全力投球しています。

37. 兼氏 歩 特任教授

(平成3年卒業)

医学部・整形外科学



富田勝郎名誉教授の整形外科教室に入局し、平成10年1月に整形外科助手となり、松本忠美助教授が金沢医科大学整形外科主任教授として赴任された平成11年4月に金沢医科大学整形外科教室に転任いたしました。当時より股関節疾患の基礎研究、臨床研究に携わって参りました。平成23年からは金沢工業大学の客員教授も併任しており、基礎研究では日本人に適合しやすい新しい人工股関節のデザインや長期耐用のための力学挙動、生体材料などバイオメカニクス、バイオマテリアルの研究を行って参りました。また我々のデザインした人工股関節は臨床応用され、多くの患者さんに使用されています。平成16年から厚生省難治性疾患克服研究事業分科会に所属し、特発性大腿骨頭壊死症診療ガイドライン策定委員も務めました。臨床研究では多くの股関節患者さんのデータから新しい知見を報告して参りました。今後も多くの大学院生や医局員と研究を重ねたいと存じます。

38. 川口 真史 講師

(平成14年卒業)

医学部・整形外科学



平成14年3月に金沢大学を卒業し、祖父の脊髄損傷をきっかけに同年4月に整形外科に入局、希望であった脊椎班に入れていただきました。その後、金沢医科大学に赴任させて頂いて川原教授の指導もとで幸運にも様々な難易度の高い脊椎手術を経験させてもらっています。医科大学に

経験や知識も少ないため大変な日々を経験しましたが、川原教授からのマンツーマンの指導のおかげで、自分でもかなり手術の能力は伸びたように思います。現在は脊椎外科を希望する若手がどんどん増えてきており、彼らとともに修行の毎日で、自分が経験したものを、同じように若い先生方に還元したいと思っています。また、基礎研究の面では金沢工業大学の新谷教授とインプラント関連の共同研究を行い、いくつかの特許出願も行いました。なかなか製品化するまでには大変ですが、全く異なる分野の方々と関わることができ楽しく過ごしています。

39. 川崎 康弘 主任教授

(平成2年大学院修了)

医学部・精神神経科学



1985年に金沢医科大学を卒業後、金沢大学大学院医学研究科に進学し、山口成良教授の主催する神経精神医学教室に入局しました。診療に従事すると同時に、山口教授、越野好文教授の指導のもと神経病理学の臨床研究グループに所属し、精神疾患の病態研究をおこないました。2000年からは富山大学にて倉知正佳教授、鈴木道雄教授のもとで、教室発展に専心しておりましたが、地引逸亀教授の後任として、2010年7月に現職に着任いたしました。現在は、精神疾患への早期介入や思春期青年期の心の問題に関するAMED研究の分担研究者として、若者のための専門外来を開設して診療と臨床研究をおこなっております。また文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に「高齢化の進む過疎地域におけるライフ・イノベーション創出」が採択され、研究代表者として基礎医学と臨床医学にまたがる研究連携を組織しました。北陸がんプロフェッショナル養成プランおよび北陸認知症プロフェッショナル養成プランでは精神医

学の分野からの協力をおこなっております。ことに緩和医療におけるこころのケアと精神症状のマネジメント、認知症や高齢者の精神症状・心理的問題に対する専門的技法の教育や普及に努めております。

40. 長澤 達也 講師

(平成5年卒業)

医学部・精神神経科学



卒業後、神経精神医学教室(山口成良教授)に入局しました。主に精神生理学と精神薬理学の研究を行い、

現在は、国立精神神経センターが統括する精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの講師も行っております。金沢医科大学へは現・精神神経科学教室の川崎康弘教授にお呼びいただき平成30年4月に赴任いたしました。川崎教授には、大学院時代に脳画像や精神生理学を指導していただいていたのですが、現在もfunctional MRIを用いた認知機能の研究をstudent researcherとともに楽しくやらせていただいております。臨床では、当教室は光トポグラフィを用いた診断装置や磁気刺激を用いた治療など最先端の診療が可能であり、病棟医長をすると同時に入院主治医も行い、若い先生方と楽しく研鑽させていただいております。海が近く、学生時代から行っていたマリンスポーツも再開し誘惑も多いのですが、北陸の精神医学の発展と後輩の育成に寄与させていただければと考えております。

41. 北方 秀一 准教授

(平成10年卒業)

医学部・消化器内視鏡学



卒業後、金沢大学がん研究所附属病院外科に入局し、故・磨伊正義教授のもとで、外科学、腫瘍学、内視鏡診断学の指導を受け、

消化器がんの診療に携わってきました。研究面では、がん研究所組織分子構築分野(現分子生体応答研究分野)向田直史教授のもと、大腸がん肝転移過程におけるサイトカインの役割をテーマに研究を行ってきました。平成21年から金沢医科大学消化器内視鏡科に赴任し、早期消化器がんの内視鏡診断・治療に従事しています。平成26年より内視鏡センター副部長を兼務しています。また、消化器外科臨床教授木南伸一先生(平成2年卒業)の協力のもと、SM胃がんに対する胃局所全層切除術(腹腔鏡内視鏡合同手術)の開発に取り組んでいます。学外では、日本消化器内視鏡学会北陸支部ESDハンズオンセミナーにおいて平成26年より講師を務め、若手の育成に携わっています。また、昨年は日本消化器内視鏡学会北陸支部セミナーを担当しました。

42. 山田 和徳 准教授

(平成20年大学院修了)

医学部・血液免疫内科学



私は平成10年に新潟大学を卒業後、金沢大学旧第2内科に入局しました。入局後、紺井一郎先生がチーフをされている第3研究室に所属し、腎臓、リウマチ膠原病疾患について学びました。その後、川野充弘先生のもとでIgG4関連疾患について研究をさせていただきました。平成20年に、

IgG4関連涙腺炎患者さんのIgG4抗体の

クローナリティーを解析し、学位を取らせていただきました。その後も、IgG4関連疾患のモデルマウスの確立や多施設共同研究でのIgG4関連疾患の臨床像の解析をさせていただきました。平成31年4月から金沢医科大学血液免疫内科学(正木康史教授)に准教授として着任しました。リウマチ膠原病内科医の少ない環境ではありますが、各科と協力しながら、能登エリアの最後の砦となれるようがんばりたいと思っております。研究面では金沢大学と共同研究を行い、IgG4関連疾患の病態の解明を進めていきたいと考えております。

後記：これまで第1～2回に掲載させていただいた方々以外にも、金沢医科大学の教員・医師として多くの同窓会員が活躍です。以下にご紹介をいたします。

野口昌邦・乳腺・内分泌外科・嘱託教授(昭和44年卒業)、伊藤透・消化器内視鏡学・主任教授(会員Ⅱ)、渡邊直人・放射線医学・特任教授(昭和58年卒業)、土谷武嗣・心血管カテーテル治療学・臨床准教授(昭和63年卒業)、井口雅史・乳腺・内分泌外科・准教授(平成7年卒業)、長澤晋哉・公衆衛生学・講師(平成8年卒業)、南哲弥・放射線医学・臨床教授(平成9年卒業)、玉瀬玲・脳神経外科学・助教(平成14年卒業)、牛上敢・皮膚科学・講師(平成17年卒業)

(横山 仁：記)



病院紹介

国民健康保険 小松市民病院

当院の沿革

当院は昭和25年11月に「市立小松病院」(診療科目5科、病床数26床)として開設されました。平成元年4月現在地に移転新築、「国民健康保険 小松市民病院」に名称変更、平成19年には南館を増築、翌年には既存病棟を改修して病床の居住性を改善しました。現在は急性期一般病床(300床)と結核病床、感染症病床を有しています。

南加賀医療圏の 中核病院としての取り組み

地域中核病院として救急医療、がん診療、生活習慣病対策に重点を定めており、地域の医療・介護機関との連携が重要と考えています。平成16年に医療福祉室を地域医療連携室に改編、平成19年には地域がん診療連携拠点病院に指定されました。また平成21年には石川県では2番目に緩和ケア病棟、平成26年がん患者サロン「ピアサポートKatara-sa」を新設し、まさに南加賀医療圏のがん診療拠点病院として機能しています。

救急医療に関しては平成24年に南加賀救急医療センターを開設し、年間2800件の救急車搬送を受け入れています。近年は高齢で既存疾患の急性増悪で救急搬

送される患者さんが多くなり、“かかりつけ医”との連携強化のため令和元年に医療機関専用の直通電話「地域救急ホットライン」を開設しました。また、救急医療においては救急隊員との連携も大切です。小松市消防本部と協議し、救急隊員が病院内で実習しながら、指令があれば出動する「派遣型救急ワークステーション」を開設しました。

平成27年には生活習慣病センターを開設し、連携パスを用いて糖尿病対策、慢性腎臓病対策を行っています。当院は日本で有数の腹膜透析患者さんを診療しています。

さて、2025年の超高齢化時代に向けて「地域包括ケアシステム構築」が必要とされています。南加賀地区ではリハビリを中心とした回復期病床や慢性期病床は比較的充実しており、地域医療構想調整会議において当院には急性期医療が求められています。急性期病院の役割強化のため、平成30年には地域医療連携室を「つながるサポートセンター」(スタッフ数21名)にアップグレードし、患者さん一人ひとりの状況を把握して入院前から退院まで一貫した支援(入退院支援)を行い、地域の医療・保健機関や介護施設などとの連携強化を図っています。このような取り組みが認められ、紹介率・逆紹

介率が向上して令和2年4月より南加賀医療圏初の地域医療支援病院に指定されました。

多職種による チーム医療の推進

病院運営として大切にしている事は多職種によるチーム医療の推進です。平成29年には全国に先駆けて排尿自立支援チーム活動を開始し、平成30年度診療報酬改定では排尿自立指導料新設に繋がりました。院内には15名の認定看護師がおり、各医療チームで活動しています。また看護師特定研修も開始し、現在4名の修了生がいます。

基本理念を 「共に歩む」に変更

昨年は新天皇の即位と「令和」への改元が行われ、新しい時代の幕あけとなりました。令和は“美しい調和”と外国に紹介されています。当院も「患者さんの思いに共感し、多職種チームで病状・情報を共有し、かかりつけ医と共同で医療にあたり、地域の人々と共生し、共に歩みます。」との意味で、令和元年5月に基本理念を「共に歩む」と改め、地域との美しい調和を図りたいと考えております。

(病院長 新多 寿：記)

概要

国民健康保険	小松市民病院
所在地	石川県小松市向本折町ホ60番地
病院長	新多 寿
病床数	340床 (一般300、精神26、結核10、感染症4)
診療科数	27

沿革

昭和25年	市立小松病院として開設
昭和32年	国民健康保険 市立小松病院に名称変更
平成元年	国民健康保険 小松市民病院に名称変更
平成24年	南加賀救急医療センター開設
令和2年4月	地域医療支援病院に指定

日本赤十字社 富山赤十字病院

人道・博愛の 赤十字精神にもとづく 良質で安全な医療の提供

富山赤十字病院は、明治40年に開設され、今年で創立113年になる県下で最も伝統のある病院です。現在の病床数は401床(うちICU4床、CCU4床、緩和治療12床)、27の診療科、職員数792名で、地域医療支援病院、災害拠点病院、富山県がん診療地域連携拠点病院、厚生労働省臨床研修指定病院、二次救急指定病院など多くの資格を有しています。“人道・博愛の赤十字精神にもとづく良質で安全な医療の提供”を理念として、その実現のために患者さん中心の医療、より高度な医療の実践、地域医療に貢献、次代を担う医療従事者の育成、災害救護の実施といった基本方針を掲げ、地域の中核病院として救急医療・高度医療を提供しています。救急車搬送件数は年間4000台以上で、高度医療として心血管疾患と癌に力を入れています。心臓カテーテル治療、ACバイパス手術はもとより、脳血管カテーテル治療、不整脈アブレーション治療も行っております。

血液内科は、県下で唯一非血縁者間造血幹細胞移植を施行する診療科の認定基準(移植施設認定基準)認定カテゴリー1を取得しています。

地域包括ケアシステムにおける役割

地域包括ケアシステムにおける当院の役割は、急性期医療、在宅医療の援助としての訪問看護、緩和治療の提供です。地域包括ケアシステム確立の観点から7年前より地域連携が最も重要と考え、病院のスローガンとして地域連携の推進・深化・熟成、今年は飛躍を掲げています。その結果、連携の先生方のご理解ご協力により紹介・逆紹介数はそれぞれ毎月約1000件前後で当院の地域連携は非常に強固なものになっています。

臨床研修病院としての役割

将来の医療を担っていくべき人材の育成も大事です。優れた人材を世に送り出せるよう指導体制の充実を図っております。基幹型臨床研修医12名、協力型研修医を含め常時15名ほどの研修医で賑わっています。新たな専門医制度(基幹

型として内科、整形外科、麻酔科)にも対応し、内科・整形外科それぞれ1名が研修しています。

災害拠点病院としての役割

平成23年より災害拠点病院の指定を受けています。東日本大震災、熊本震災、西日本豪雨災害、台風19号長野浸水災害にはいち早くDMAT、救護班を派遣しました。

最後に、当院は独自の医療の質評価項目を測定し医療の質の向上に取り組んでいます。また、専門看護師2名、認定看護師21名と多数配置し、積極的にチーム医療を推進しています。更に、医師事務作業補助者体制の強化、特定行為研修修了看護師を活用し医師の働き方改革にも積極的に取り組んでいます。良質で安全な医療を提供し人を育て地域に選ばれる病院と認められるには、まだまだ道半ばです。引き続き金沢大学のご支援および十全同窓会会員の皆さまのご指導を今後ともよろしくお願いいたします

(院長 平岩 善雄：記)

概要

日本赤十字社	富山赤十字病院
所在地	富山県富山市牛島本町2-1-58
開設	明治40年5月
病院長	平岩 善雄
病床数	401床(緩和治療12床)
診療科数	27

沿革

明治40年	日本赤十字社富山支部病院として総曲輪に開設
明治42年	東田地方に新築移転
昭和20年8月	富山大空襲で焼失、焼け跡に再建
平成8年8月	現地に新築移転

教室だより

代謝生理学分野

我々の研究室では、食事摂取に伴う生体応答とその制御破綻の解明、さらには、栄養・代謝研究を担う人材育成を目的として、研究を展開しています。具体的には、食事摂取に伴う肝臓機能応答の制御とその破綻をモデルとして、肝臓の自律的応答と、脳-肝連関による応答の解明を進めています。

1. 肝臓の自律的応答の解明

肝臓は、食事摂取後に、ブドウ糖を取り込み、高血糖を防ぎます。肝臓での糖取り込みは、インスリン・ブドウ糖に依存しており、特に、インスリン作用は必要不可欠と考えられてきました。しかし、過栄養に伴う脂肪肝では、肝インスリン作用が保持された状態でも、糖取り込みが低下し、食後高血糖が誘導されます。我々は、このメカニズムが、グルコキナーゼ制御蛋白質 (GKRP) のアセチル化修飾により引き起こされることを見出しています。肝臓は、ブドウ糖を濃度依存性に取り込みますが、この糖取り込みは、ブドウ糖をリン酸化するグルコキナーゼ (GK) の活性に依存しています。GK量は、肝臓インスリン作用に依存しており、肝臓インスリン作用が欠乏すると、GK量が低下し、糖取り込みが著減します。GKRPは、GKに結合し、酵素活性を抑制する蛋白質です。高ブドウ糖環境では、GKRPがGKから解離し、GK

活性を亢進させることで、糖取り込みを引き起こします。しかし、脂肪肝で増加するアセチル化GKRPは高ブドウ糖環境下でもGKから解離せず、その活性を恒常的に抑制します。その結果、脂肪肝では、肝臓インスリン作用が保たれGK量が維持されていても、糖取り込みが低下します。GKRPは、非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) のヒト原因遺伝子の一つと考えられています。現在、我々は肝糖取り込み障害の生体における役割、さらに、NAFLDに及ぼす作用の解明を進めています。

2. 脳-肝連関による応答の解明

肝臓の糖脂質代謝制御は、膵内分泌と代謝物だけではなく、中枢神経/自律神経系による制御を受けることも明らかにされてきています。具体的には、視床下部で栄養情報の変化を感知し、自律神経を介して、食事摂取から骨格筋の糖取り込み・脂肪細胞の糖脂質代謝など、全身の糖脂質・エネルギー代謝を制御します。肝臓では、中枢神経/自律神経系は、肝糖産生を制御しています。我々は、この分子メカニズムの解明を行い、視床下部でのインスリン作用・アミノ酸作用が、迷走神経活動を調節し、 $\alpha 7$ 型ニコチン受容体を介しクッパー細胞機能を制御することで、肝糖産生を調節することを見



出しています。このメカニズムは、脳-肝連関が、代謝情報を、自律神経情報、さらには、免疫情報に変換する仕組みであることを示しています。実際に、過栄養では、脳-肝連関が破綻しますが、その破綻によって、耐糖能異常だけでなく、肝臓の慢性炎症も悪化することを見出しています。我々は、生体制御システムのクロストークである臓器連関の仕組みが、肥満・高血圧から代謝異常・癌にまで亘る生活習慣病の病態の誘因となる可能性を考えており、現在、一層の臓器連関メカニズムの解明を進めています。

3. おわりに

今回は、我々の研究室の代表的な研究内容を紹介させていただきましたが、我々は研究人材の育成も重視しています。我々の研究室では、開設以来3名のスタッフ研究者が在籍してきましたが、全員が、学会の研究奨励賞を受賞しており、このことは、我々の人材育成への取り組みが評価されたものと考えております。今後も、医・保健・農・理と幅広い領域から集まってくる研究室メンバーとともに栄養・代謝から、より幅広い生理学研究に取り組んでいきたいと考えています。

(井上 啓：記)

スタッフ

教授	井上 啓
助教	稲葉 有香
技術補佐員	朝日 千晶
	永森 香
大学院生	2名

研究分野の沿革

代謝生理学分野は、2012年、医薬保健研究域附属脳・肝インターフェースメディシン研究センター教授として井上が着任した際に、開設されました(その後、2015年に、井上は、新学術創成研究機構に配置換え)。2016年には、医薬保健学総合研究科とともに、新たに設置された先進予防医学研究科においても、代謝生理学分野が開設され、両研究科に参画し、現在に至ります。

リウマチ・膠原病内科学

診療

リウマチ・膠原病内科学教室では、関節リウマチや全身性エリテマトーデス、強皮症、筋炎、血管炎、IgG4関連疾患、シェーグレン症候群など関節炎や疼痛、発熱などを主症状とする、自己免疫異常を背景とした疾患を治療・研究対象としています。臓器病変は多岐にわたるため、皮膚科、眼科、整形外科、放射線科、耳鼻咽喉科、腎臓内科、血液内科、呼吸器内科、小児科、病理学などの専門家とも密に連携し、各専門家による幅広い視点、専門的で最新の医療が受けられるように心掛けております。入院症例で多いのは関節リウマチと全身性エリテマトーデスですが、不明熱や日和見感染の症例も多数います。IgG4関連疾患、シェーグレン症候群に関しては多くの症例経験があり、診断困難な症例など広く北陸医療圏からご紹介頂いております。

教育

罹患臓器が多岐にわたることが多いことから、総合内科的な視点を重視した教育を心掛けています。その一環として当教室出身の自治医科大学総合診療部門教授の松村正巳先生には診断学について毎年医学類3年生の講義を担当していただき、また毎年米国UCSFから「診断学の



神」と言われるローレンス・ティアニー先生をお招きして、金沢大学をはじめ、北陸の医学生・研修医とともに診断学について研鑽を続けています。

研究

当教室の研究対象はIgG4関連疾患、シェーグレン症候群、関節リウマチ、全身性エリテマトーデス等です。比較的症例数の少ない疾患ですが、北陸三県のリウマチ関連施設と連携し、多施設共同臨床研究を進めています。また、これら疾患の基礎的な研究として学内、学外の組織と共同研究を行っています。

IgG4関連疾患については全国レベルの多施設共同研究を積極的に進めており、IgG4関連腎臓病に関して多施設共同研究を行い、本疾患に特徴的な臨床病理像やステロイド治療後の臨床経過を明らかにしてきました。また、2011年の本疾患診断基準作成にも関わり、現在は診断基準改定に向けた現行の基準の妥当性の検証も行っています。IgG4関連血管病変についても当科の水島らが診断基準作

成ワーキンググループに参加し、全国から収集した多数の患者データに基づいて、血管病変特異的な診断基準を作成しました。

2007年より全国レベルの研究会であるIgG4研究会を組織し、本疾患の臨床と研究の発展に寄与してきましたが、2019年よりこのIgG4研究会は日本IgG4関連疾患学会として新たなスタートを切り、当科科長である川野充弘が初代理事長に就任しています。

おわりに

当教室は金沢大学内科の中では歴史が浅く、小規模な教室です。その分教室員が一丸となって診療、教育、研究分野において精進し、金沢大学附属病院並びに北陸の医療の発展に寄与したいと思う所存です。十全同窓会の諸先生におかれましては、今後とも温かいご指導を賜りますようお願い申し上げます。

(藤井 博：記)

スタッフ

講師 川野 充弘(診療科長)
助教 水島伊知郎(医局長)
助教 原 怜史
(医学教育研究センター)
特任助教 鈴木 康倫
(研修医・専門医総合教育センター)
医員7名、大学院生2名、
事務補佐員1名、技術補佐員2名

研究分野の沿革

大正13年に開講した旧第二内科を源流とし、昭和43年に黒田満彦先生(その後福井医科大学教授に就任)が中心となって腎疾患を研究する研究室が立ち上げられ、研究テーマは骨代謝、免疫学、さらにリウマチ・膠原病学へと幅を広げ、現在のリウマチ・膠原病内科の礎となりました。平成31年に金沢大学内科の臓器別再編が行われ、現在のリウマチ・膠原病内科が立ち上げられました。

支部だより

埼玉支部

令和元年10月26日(土)に第11回金沢大学十全同窓会埼玉支部総会が埼玉県川越市で開催されました。

第1部は埼玉医科大学かわごえクリニック大会議室を利用して本部と支部内から2題の御講演をいただきました。埼玉医科大学病院神経精神科・神経内科教授に新しく就任された小田垣雄二教授に「精神疾患の病態と治療に関する薬理・生化学的研究の軌跡：研究を志す若き臨床家へのエール」のタイトルで、教授になっても研究心の尽きない大学教員の鑑のような心得を拝聴いたしました。続いて大学本部からお越しいただいた金沢大学附属病院病院長・金沢大学大学院医薬保健学域医学類放射線科学蒲田敏文教授から「金沢大学医学類と附属病院の現状」のタイトルで最近の医学部の状況と新しい大学病院についてのご紹介を賜りました。医師国家試験合格率向上を果たした

母校医学部の教育改革と日本一美しい大学病院の完成についてのお話を皆で感慨深く拝聴いたしました。ほとんど国家試験対策のなかった時代の年代からすると隔世の感があります。大学附属病院建て替え計画が、故高島力放射線科学教授が病院長の頃から計画され、長い年月を経て蒲田病院長の時期に完成したことや、病院正面玄関前の植栽に貴重な(高価な)深紅のノトキリシマツツジなどを植えたことなど大変興味深いお話でした。個人的には「大学病院のお金は何とかなるものです」とのお言葉が印象的に残りました。我々の病院長にこそ聞かせたい言葉です。

第2部は、道路を挟んで最寄りの日本料理屋「さわや」に移動して懇親会に移行しました。初めて参加の会員もあり、各自の専門を越えて熱心な情報交換が行われました。自己紹介と近況報告を順番に行い、お酒が回る頃には参加者全員打ち解けましたが、2時間余りがあっという間に過ぎてしまい、名残を惜しんで最後に集合写真を撮ってお開きとなりました。北陸新幹線ができてから埼玉は金沢へ大

変近くなり、川越から3時間程度で金沢まで行けるようになりましたが、少し前にあった台風19号による洪水の影響で北陸新幹線が不通になってしまいました。総会前になんとか再開通したことで、蒲田先生は最終便でその夜のうちに無事金沢にお帰りになることができてほっといたしました。飛行機では羽田から小松経由で倍近くの時間がかかることになるからです。何はともあれ寛容な参加会員の皆さまのご協力を得て、同窓の交友を深める実り多い1日を過ごすことができたことに感謝申し上げます。

参加者15名(敬称略)：写真左から、久慈一英(平成2年卒業)、原佑樹(平成25年卒業)、山藤和夫(昭和51年卒業)、松田博史(昭和54年卒業)、松成一朗(昭和62年卒業)、小田垣雄二(昭和57年卒業)、新村兼康(平成4年卒業)、蒲田敏文(昭和58年卒業)、河野正志(平成6年卒業)、宮前達也(昭和37年卒業)、神田浩明(昭和63年卒業)、中山光男(昭和57年卒業)、鈴木智成(平成6年卒業)、守谷研二(平成7年卒業)、市川聡裕(平成5年卒業)。

(久慈 一英：記)



三重支部

令和元年度十全同窓会三重支部会総会は、令和2年2月2日(日)に三重県津市の料亭「はま作」で行われました。本年度総会には8人の会員の先生方が出席しました。三重支部では、支部長原田資先生(昭和46年卒業)のもと、今回の総会も、和やかに進行していきました。今回は新たに田端勇作先生(平成31年卒業)が入会されました。来年は今年以上に多くの先生にご参加いただけることを願っています。現在の三重支部の会員数は22名です。

会計報告の後、水本龍二先生(昭和30年卒業)より、日本消化器外科学会創立50周年記念インタビューのお話と記念誌が参加者全員に配られました。精神科が専門である私ですが、大変わかりやすく、また、研究や実臨床ととても興味深い内容でした。原田先生からは、十全同窓会総会のお話をいただきました。その後、いつものように、懇談会に移りました。懇談会では各先生方の趣味からお仕事のお話など多くのお話をうかが

えてとても楽しく、勉強になりました。このように三重県での同窓会を開いていただくことで、忙しさのあまりに、外来や入院治療を淡々とこなしてしまっていた1年間の反省と、これからのよい励みとなりました。また来年、先生方にお会いするまでに、一つでもよい臨床成果を出せるよう1年間、精進しようと心に誓いました。そして懇談会も和やかな雰囲気うちに終わり、閉会となりました。本当にあっという間の時間でした。また、

来年の同窓会も楽しみにしています。今回参加できなかった先生方も、ぜひ、次回のご出席をお待ちしています。

写真後列左から：大石晃嗣(昭和63年卒業)、黒川義博(平成21年卒業)、伊藤敏秋(昭和52年卒業)、祖父江直久(昭和51年卒業)、前列左から：田端勇作(平成31年卒業)、水本龍二(昭和30年卒業)、原田資(昭和46年卒業、支部長)、中瀬玲子(昭和62年卒業)、敬称略。

(黒川 義博：記)



支 部 だ よ り

沖 縄 支 部

令和元年度金沢大学医学部十全同窓会
沖縄支部総会・懇親会は、令和2年2月
22日に例年通りダブルツリー-byヒルト
ン首里城で十全同窓会の中村信一会長御
夫妻をお迎えし、43名中17名の会員が
参加して開催されました。司会は会計の
昭和60年卒業の浜端宏英先生にお願い
し、まず初めに昭和57年卒業の私、知
念弘が開会のご挨拶をさせていただきました。
次に浜端先生より、当日参加でき
ない先生方の近況報告と紹介をしていた
だき、その後中村会長の講演に移らせて
いただきました。中村会長からは金沢大
学の変革と世界に通用する金沢大学にす
るための戦略を力説していただきました。
その際にはものすごいパワーを感じまし
たが、金沢大学の変革のスピードがまだ
まだであるとの中村会長のお言葉をいた
だき、考えの甘い自分を自覚させられま
した。中村会長、刺激のあるご講演を沖縄
でお聞きできたことに感謝申し上げます。

その後、懇親会へ移らせていただき
ましたが、乾杯の音頭は昭和46年卒業
の喜屋武元先生に取っていただきました。
先生は中村会長とは弓道部の先輩・後輩
の間柄とのことでした。歓談の時間には、
例年通り昭和51年卒業の上里博光先生
から名酒天狗舞の差し入れがございま
した。上里先生、いつもごちそうさまです。

記念撮影の後は、昭和31年卒業の金
城圀昭先生、昭和37年卒業の国吉勲先
生、昭和46年卒業の安谷屋茂男先生、
昭和51年卒業の上里博光先生、昭和53
年卒業の伊波久光先生の近況報告・ご挨
拶がありました。

今回は特別ゲストとして昭和56年金
沢大学法学部卒で現沖縄県浦添市教育長
の嵩元盛兼様にご参加いただき、教育の
重要性と教育現場の大転換についてお話
しいただきました。中村会長も教育変革
は最重要事項だと、しきりにうなずいて
いた光景が印象的でした。

その後、昭和47年卒業の知名保先生
の前口上で四高寮歌、南下軍の歌を参加
者全員で合唱し、締め挨拶を元十全同
窓会沖縄県支部長で昭和46年卒業の大
浦孝先生にお願いし懇親会を閉会といた

しました。2次会も7名の先生方が参加
し、盛り上げていただきました。

中村信一会長御夫妻には本当にお忙し
い中、沖縄にご来沖いただきありがと
うございました。沖縄県の会員を代表して
心より感謝申し上げたいと思います。

来年も同時期に同窓会を行う予定です。
会員の皆さま、体調には十分ご留意いた
だきまた元気な姿でお会いしましょう。
写真は前列左から大浦孝(昭和46年卒
業)、国吉勲(昭和37年卒業)、金城圀昭
(昭和31年卒業)、中村信一十全同窓会
会長、奥様、知念弘(昭和57年卒業)、喜
屋武元(昭和46年卒業)、2列目左から安
里公(昭和48年卒業)、堀川恭偉(昭和56
年卒業)、嵩元盛兼(昭和56年法学部卒
業)、上里博光(昭和51年卒業)、安谷
屋茂男(昭和46年卒業)、仲里博彦(昭
和52年卒業)、3列目左から知名保(昭
和47年卒業)、伊波久光(昭和53年卒
業)、伊是名博之(昭和49年卒業)、浜
端宏英(昭和60年卒業)、国吉光雄(昭
和46年卒業)、楠憲夫(昭和47年卒
業)、上原元(昭和50年卒業)以上、敬
称略。

(知念 弘：記)



ク ラ ス 会

42年卒業同窓会

42年卒業同窓会は、ほぼ2年に1回の割合で開かれている。今回は海を渡り沖縄に行ってみたいという意見がでて、沖縄にまだ行ったことのない同級生もあり、地元相談会でも大賛成となった。昭和42年卒業の沖縄在住の富山幸佑さんは、快く、地元幹事を引き受けてくれた。

令和元年11月17日、天候にも恵まれ、全国から、各自が航空券・宿泊先を自由に決めた沖縄パックを利用して18名が参加、料亭那覇で夕食宴会が開かれた。

最初に富山さんから、「那覇から、船で鹿児島に行き、それからほぼ1日かけ

て列車で金沢に行った思い出。お世話になった金沢に恩返しと、終活の一つと思い準備した。亜熱帯気候の沖縄の風土とグルメを十分楽しんでください」と歓迎のあいさつ。日本に復帰する以前の沖縄から、金沢への往来がどれほど困難なことであったか再認識するとともに、富山さんの想いに感動。続いて、一人ずつ、近況報告となったが、病気を克服した話、診療に従事している話、また、初めて同級会に参加して研究歴・臨床歴を披露する人もいた。いずれも後期高齢者を自覚して意気軒高と充実した老年期を送っている様子がうかがえた。沖縄宮廷料理、琉球舞踊をたのしみ、最後には全員でカチャーシーを踊りまくった。

同級会には、奥様同伴でゴルフを楽しんだ方、家族連れで参加して観光を楽し

んだ方もいた。同級生同士で石垣島に渡り、石垣島のやいま村の琉球文化にふれ、川平湾のグラスボートで赤、黄、青、白、緑の大きな珊瑚礁の美しさに感動、川平湾の白くて細かい砂はサンゴの死骸と聞いて“白い砂サンゴの泪かもしれぬ”と詠み、水平線に沈む大きな太陽に感動したひと。観光地を訪れるとともに地元の反対をよそに強権的に進められている、辺野古基地埋立地、巨大な嘉手納基地などを訪れた人もいた。

心配された事故もなく、無事、同窓会を終えることができ、感謝です。

42年卒業同窓会

「那覇で夕食会をしましょう」幹事一同



令和2年金沢大学関東放射線医学・核医学同友会総会開催

埼玉支部

久慈 一英

(平成2年卒業)

関東にはさまざまな医局に属する金沢大学同窓の放射線科医がいます。歴史的に金沢大学出身の優秀な先輩が関東で活躍されており、慶應大学、防衛医科大学校、東邦大学、埼玉医科大学、東海大学、東京医科大学など多くの大学の教授を輩出しています。現在でも放射線科の現役教授が帝京大学、東邦大学、埼玉医科大学におり、大病院の部長なども複数いることから、このような会を開くに至りました。直接のきっかけは、私の元上司であり認知症画像診断でご高名な松田博士国立精神神経研究センター脳病態統合イメージングセンター長の退官記念で集まろうということでした。金沢大学核医学出身ながら、核医学にとどまらない広い領域で活躍されています。現在の所属や経歴はさまざまですが、各個人のネットワークから30名余の数多くの同窓放射線科医に連絡をとることができ、老若男女18名の参加となりました。特に若い参加者の多いことは嬉しい驚きでした。残念ながら今回連絡リストから漏れた同窓がまだいると思われますが、次回参加を希望される方は同窓会経由等でご連絡をいただきたいと思います。今回、僭越

にもお声を掛けましたところ、ご多忙中にもかかわらず、絹谷金沢大学核医学教授・十全同窓会会報編集長がわざわざご参加くださいました。

令和2年1月25日、東京新宿副都心の天津飯店新宿本店にて開催趣旨説明の後、平松東邦大学名誉教授の開会のご挨拶に引き続き絹谷教授の乾杯のご発声で始まりしました。初対面同士も多く、中華料理のテーブルを囲みながら名刺交換や情報交換などで盛況でした。メインの松田センター長から退官のご挨拶があり、寺田東邦大学佐倉医療センター教授から記念品の贈呈の後、小泉東京医科大学名誉教授の司会で各出席者の自己紹介と近況報告となりました。お酒がまわってきますと若い発表者への鈴木東海大学名誉教授他、重鎮からの質疑も鋭くなり、3時間近くの間があつという間に経過しました。最後に集合写真撮影を行い、大場帝京大学教授から閉会のご挨拶で無事終了となりました。

放射線科には大きな分野として画像診断学、核医学、インターベンション、さらに放射線治療がありますが、大学や病院によって組織形態はさまざまです。昨

今の放射線科医人材不足による厳しい状況からすれば、関東では所属を越えて同窓の優秀な各分野の放射線科医同士で協力するのが最良の方法と思われます。さらに将来的には母校との放射線科医としての絆が強まれば、なお素晴らしいというのが、我々共通の思いと感じました。この会がそのような第一歩になれば素晴らしいと思い、無事開催できたことを参加者全員に感謝いたします。

参加者18名(敬称略)：写真前列左から平松慶博(昭和37年卒業)、松田博史(昭和54年卒業)、鈴木豊(昭和40年卒業)、絹谷清剛(昭和61年卒業)。後方列左から久慈一英(平成2年卒業)、横山幸太(平成24年卒業)、市川聡裕(平成5年卒業)、中井雄大(平成23年卒業)、上田和彦(昭和63年卒業)、苅込正人(昭和60年卒業)、俵原真里(平成3年卒業)、松成一朗(昭和62年卒業)、大場洋(昭和60年卒業)、河野正志(平成6年卒業)、小泉潔(昭和51年卒業)、吉田啓介(平成16年卒業)、坂本直也(平成28年卒業)、寺田一志(昭和60年卒業)。



学生コーナー

臨床実習を開始して

医学類 5年
小式澤 祥

学生生活を振り返る場を与えられたことを感謝いたします。

現在、私は医学類の新5年生としての生活を始めようとしているところです(寄稿は3月現在)。私たちの学年から臨床実習の週数が増え、2019年12月から、北陸地方を中心としたさまざまな病院にお世話になり、実習をスタートさせました。約半数の学生が大学病院ではない病院でお世話になっています。私も、過去3カ月の間に4つの病院(1日研修の病院も含めた場合は6つの病院)と2つの消防署の出張所にお世話になりました。はじめは手探りの中、同級生と相談し合い、先生方にお尋ねし、緊張しつつ実習へ向かいました。臨床実習の形態が私たちの学年から「診療参加型臨床実習」へと変更になりましたが、初日の緊張感と「臨床」に慣れるまでの試行錯誤や苦悩は、先輩方も、また医師に限らず医療福祉に従事するすべての先輩方が通られてきている道であることを想像します。

オリエンテーション時にお話いただいたことは、医学生は、日々患者さんの基本的身体診察を行い、学生カルテを記載し、上級医や医療チームとディスカッションをし、1日一定時間を患者さんのベッドサイドで過ごし、ゆっくりお話を聴くことが望まれているということでした。もちろん超急性期や医学生には関わるのが難しいデリケートな問題を扱う診療科ではこの限りではなく、他の形態で学ばせていただく機会を与えていただいています。

提供していただいている休憩室や図書館のラウンジで私たち学生同士が交わす言葉の中にも講義が中心だった4年生の

秋までの学びとは違った視点が含まれているように思います。純粋に医学的なことだけでなく、歯切れの良い言葉で治めることができない腑に落ちないモヤモヤ、悩み、ジレンマも含まれているからです。医療チームが取れる他の対応にはどのようなものがあり得たか、患者さんの気持ちはどうだったか、自分のとった態度・言葉はどうだったか。些細な臨床風景の中にも、引っかかる何かが胸の中に留まることがありました。

しかし、そこで少しホッとしたことは、実はこのようなジレンマの中に医療者は日々生きているということを先生方の口を通じて知ることができたことです。臨床実習の現場でも、また大学病院に戻ってからのディスカッションの場でも、実は医療者はこのようなことと日常的に向き合い、その中で臨床をされていると知ったことでした。

私たちは大学病院以外の病院で4週間の実習を行った場合、最終日に大学に戻って実習先で学んだことや抱えた課題を討議する時間を設けていただいています。その中の一つに上記のような倫理的側面を話し合う機会がありました。臨床の中で白黒つけられない問いはどのような原則に重みを置くかでとる対応が少しずつ異なってくることを学び、決して簡単ではないことを学びました。そして、ディスカッションをすることの必要性も体験することができました。それは、実際に話し合いを始めると、実習先の病院は異なっても同じジレンマを抱えて戻ってきた学生が他にも身近にいたことに気づくことができ、自分が軽視していた視点の重要性に気づかされたからです。また、話し合い、共有するということだけで、気持ちが少し楽になることも体験しました。

さらに、今回私たちは大学病院以外の数多くの病院で長期に渡り実習をさせていただいたことを通じて、医療者として早い段階から医療・福祉についての広い視野を与えていただいていることにも気づきました。その病院の役割や立地、地域の人口分布、予防的視点から取り組ん



でいることなど、概念的なことを超えて体感するものが、少しずつにはありますが、存在します。例えば、患者さんとの会話、往診時のご自宅や施設の様子、病院に向かう途中に私たちが目にする風景。他にも、先生方がその病院や地域の抱える課題やご家族の抱える現実上の想いを共有してくださることもあり、多面的にものごとを考えるように促されることもありました。中には、学生同士連絡を取り合って悩みを相談し合い、目の前の患者さんの課題が国や地域の医療体制とも結びついているとの気づきを共有し合うこともありました。

基礎研究でお世話になった先生が「臨床は知的好奇心が主眼では成し得ない」と以前諭していただきましたが、今回実習に身を置いてこの言葉を理解するに至っています。臨床の場は人との交わりの中にあるため、人と向き合うことを求められ、私たち自身の課題にも自ずと目を向けざるを得ないということも知りました。患者さんと向き合う中で、静かに教えられることもありました。

最後になりましたが、知識も経験も少ない私たちを受け入れ、実習の機会を与えてくださる先生方、コメディカルの方々、学生一人ひとりのカリキュラムに合わせ調整や連絡をしてくださる学務係の方々、患者さんとそのご家族、地域の方々に感謝いたします。ご多忙の中、親身にご指導くださる多くの先生方の姿勢から私たち自身の姿勢も問われました。初めて書く症例サマリーに二度三度と赤字で修正してくださったこと、初歩的な質問にも応答してくださったこと、救急隊員の方々がたった一人の学生のためにシミュレーション模型を準備してくださったことなど、ここには書き切れない多くの方々の支えを思い出し、その中で学ばせていただいていることに感謝申し上げます。

謝 恩 会

令和2年3月22日、金沢ニューグランドホテルにて開催予定でありました「令和元年度金沢大学医学類謝恩会」を中止とさせていただくことになりました。

新型コロナウイルス感染拡大を受け、開催の可否について実行委員内外で議論を重ねたところ、医薬保健系事務部学生課から「医薬保健学域として謝恩会は控えるようにしてください」と連絡があり、参加者の健康を最優先に考えた結果、中止を決定した次第です。

ご出席予定でありました卒業生104名、先生方29名の計133名もの方々が

この日を楽しみにされていたことを思うと、とても心苦しい判断となりました。謝恩会実行委員といたしましても、金沢ニューグランドホテルの方々をはじめ多くの方にお力添えいただき準備を進めていたところこのような状況となり、大変残念でした。また、お世話になった先生方には感謝の気持ちをお示しする場がなくなり、申し訳ない気持ちで一杯です。

今年度は卒業式等も中止となり、最後に全員で顔を合わせる機会なく卒業の日を迎えることとなりました。

そのような中ではありますが、この4

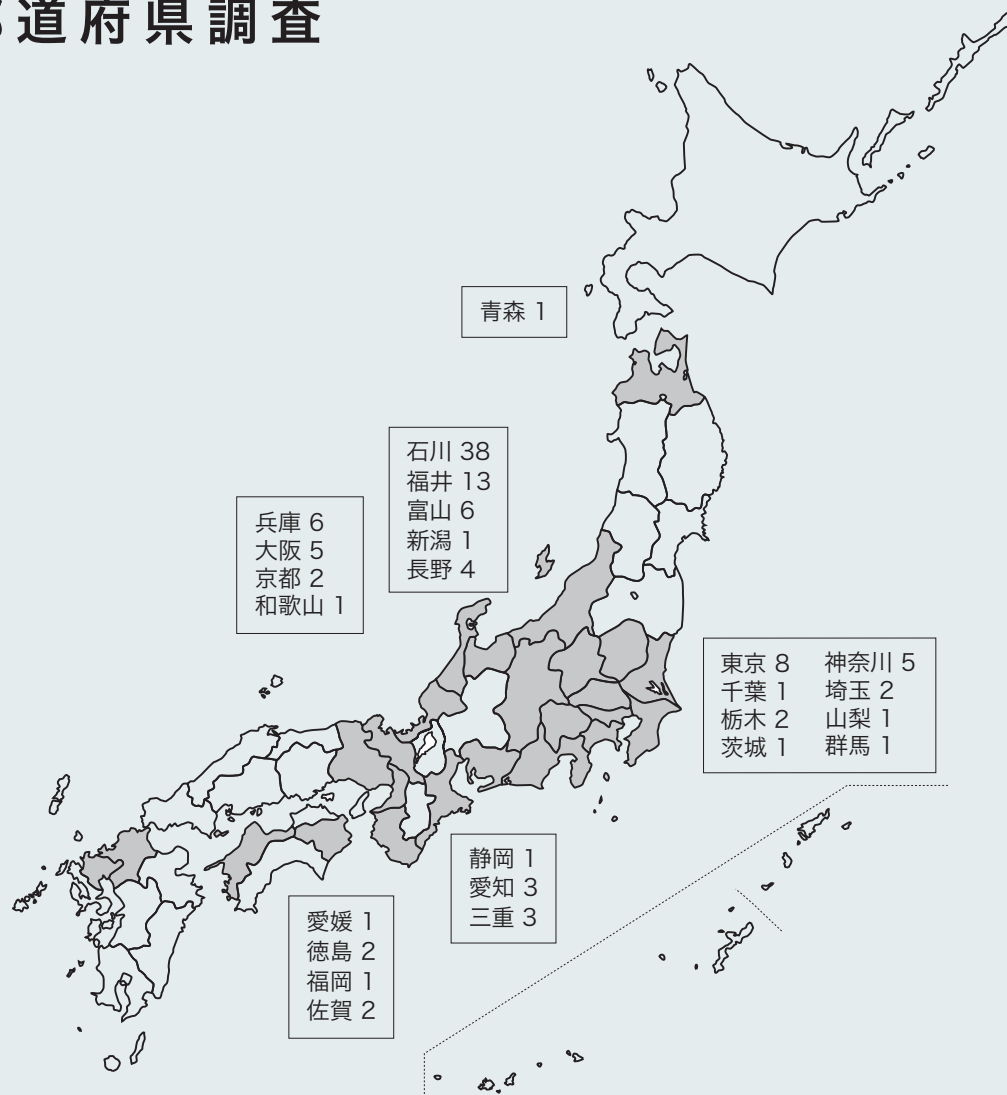
月からようやく私たちは長年思い描いてきた医師としての歩みを始めることとなります。どのような環境でも、金沢大学で学んだことの誇りと初心を忘れず医療に貢献して参りたいと思います。

最後に、中止とはなってしまいましたが、本謝恩会準備に際し、十全同窓会の皆さまにご支援賜りましたこと、深く感謝いたします。ありがとうございました。

(令和元年度謝恩会実行委員長

谷山 雄一：記)

令和2年度 医薬保健学域医学類入学者 出身都道府県調査



令和2年3月卒業者進路

阿江耕一郎
青木 裕哉
朝倉 啓太
安藤 優介
池田 彩恵
石黒 太郎
石田 侑希
石山 皓一
磯野 真子
伊藤 綾香
伊藤 賢奎
伊藤 拓未
伊藤 昌廣
稲場 太志
岩井 孝憲
上田 祥子
牛島 将希
内田 亘
永洞 明典
大窪 昭史
大筒 将希
大西 翔
風見 健太
梶間 諒
勝木 航志
加藤 聖
金子 裕紀
上久保佑太
川島 隼人
川畠 靖正
菊池 潤太
北口 耀子
工藤 誠也
久米菜津子
藏谷 一平
小浦 佑真
小平 友郎
後藤 大祐
小林 直樹
小又 優樹
近藤 孝彦

近藤 凌平
齋藤 寛晃
坂口俊太郎
坂下 正考
佐藤 美並
佐野 暢彦
佐原 茜
島 壮輔
島野 凌
下園 真人
春藤 英明
白石 裕紀
鈴木 尚登
鈴木 康喬
祖父江 秀
高木 敦仁
高山 英也
高山 恭滉
田川 雄斗
滝野 成道
竹中 雄輝
多嶋 美香
田中 智
田中 春佳
谷山 雄一
寺尾 直也
寺崎 健人
寺下愉加里
中川 里紗
東城 祐介
道谷 直樹
富田 瑞歩
永井 香月
永井 浩平
中川 里紗
長崎 剛希
中野 雅規
西野 真由
西村 和記
西村 健太
西村 康平

西村 卓真
西村 哲也
能口 祐一
灰谷 淳
橋 孝典
伴 真之佑
坂東 彬人
樋口 佑成
平戸 佑樹
平野 雅俊
福原 香那
藤原 美香
古川 敦
前田 耀士
松岡あかり
松岡 高弘
松村 直紀
三浦穂乃果
水野 綾香
溝上 裕也
南 昂宏
宮本 峻平
村上 航平
村田美希乃
本南 研人
森 雅博
森田 英典
柳澤 宏嘉
山崎 龍矢
山田 はな
山本 健太
山本 信
山森 文敬
吉岡 暁
吉野明日香
吉野 裕貴
米澤 侑汰
和田尚一郎
渡辺 優磨
渡辺 俊介

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。

会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせ致します。

①自動引き落とし(手数料本会負担)

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛お知らせください。

折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。

是非この機会にご検討くださいますようお願いいたします。

②払込用紙(手数料本会負担)

従来通りの「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。

(お振込の際は、ご氏名の前に会員番号のご入力をお願いいたします)

北陸銀行 小立野支店

普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局

TEL: 076-265-2132 FAX: 076-234-4208 Email: juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

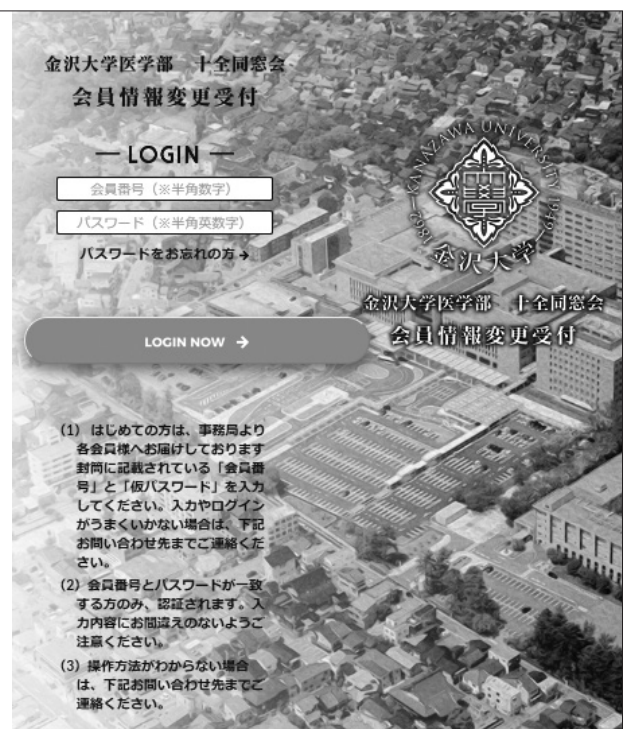
連絡先の変更・ご異動の際は、
金沢大学医学部十全同窓会
会員情報変更サイトをご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member>

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL: 076-265-2132

Email: juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

— LOGIN —

会員番号 (※半角数字)

パスワード (※半角英数字)

パスワードをお忘れの方

LOGIN NOW →

(1) はじめての方は、事務局より各会員様へお届けしております封筒に記載されている「会員番号」と「仮パスワード」を入力してください。入力やログインがうまくいかない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

(2) 会員番号とパスワードが一致するのみ、認証されます。入力内容にお間違えのないようご注意ください。

(3) 操作方法がわからない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。



他とはちょっと違います。

医療システムは **PSP** 株式会社

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-13-1 TEL 03-4346-3180 www.psp.co.jp

GE Healthcare



Partners for Better Health

Helping You Achieve Desired Outcomes

先生方が求めるアウトカム（結果）を達成するための
パートナーとなるべく 全力を尽くします

患者満足向上

INCREASE PATIENT
SATISFACTION

卓越した臨床

ACHIEVE CLINICAL
EXCELLENCE

検査効率の改善

IMPROVE OPERATIONAL
EFFICIENCY

持続可能性を推進

DRIVE
SUSTAINABILITY



患者さまのための臨床上の有用性、オペレーション効率、経営改善…

GEは、お客さまが求めるさまざまな成果を実現する、先進的な画像診断技術とソリューションをお届けします

皆さまと共に、GEの技術で医療の未来を切り拓く

GE ヘルスケア



で検索

JB57808JA



Eisai

hvc
human health care

患者様の想いを見つめて、 薬は生まれる。

ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ

エーザイはWHOのリンパ系フィラリア病制圧活動を支援しています。



BAYER

// より良い 明日へ

患者さんとそのご家族の
「満たされない願い」に
応えるため、
革新的な新薬をいち早く
お届けすることが
私たちの使命です。
医薬品の開発を通じて人々の
クオリティ・オブ・ライフの向上に
貢献していきます。

バイエル薬品株式会社
<http://byl.bayer.co.jp/>

Science for a better life

LJP.MKT.10.2013.1811

nihon
medi+physics

明日の幸せを願い、
「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの
早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、
がん治療用の医療機器、疼痛緩和に有効な治療薬などの
創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

f o r t h e h a p p i n e s s

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)

<http://www.nmp.co.jp/>



日本メジフィジックス株式会社

2018年8月作成

✿ ホテル日航金沢

幸せ時間は、
いつもここに。
25th

SPECIAL THANKS!

おかげさまで ホテル日航金沢は 開業25周年を迎えました

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)
Tel : 076-234-1111 Fax : 076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp



まごころで健康を

アルプ

Academic
Laboratory
Pharmacy



調剤薬局 アルプ薬局 / 臨床検査 / 食品・環境衛生検査 / コンサルタント業務

会報編集委員の紹介

学内編集委員(13名)

蒲田 敏文
中村 裕之
横山 茂(副編集委員長)
絹谷 清剛(編集委員長)
篁 俊成
和田 隆志
佐々木素子
谷口 巧
山本 靖彦
中田 光俊
倉知 慎
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(21名)

山口 成良
津川 龍三
赤祖父一知
佐藤 保
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
太田 哲生
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
中本 安成
常山 幸一
古川 健治
若山 友彦
中西 清香

以上34名で構成されています。

土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真

宝町キャンパスの桜

2020年4月、宝町キャンパスの桜が満開を迎えました。写真はプロムナードから見る教育棟です。金沢大学角間キャンパスにはソメイヨシノやヤマザクラなど約3600本の桜があり、金沢城内にあった旧キャンパスと同様に金沢の桜の名所にもなっています。

題字：中村 信一(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会

会報編集委員会

〒920-8640 金沢市宝町13-1

<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和2年5月18日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、4月下旬までに全世界で感染者数約300万人、死亡者数約20万人に達しており、中世のペスト、1918年インフルエンザ・パンデミック等と並んで人類史に刻まれる出来事となりそうです。同窓会の皆さまには日常の診療や研究から生活のあり方で、影響を受けていない方はおられないと思われます。同窓会員とご家族のご無事とご健康をお祈り申し上げます。

衛生・栄養水準の向上やワクチン・化学治療薬の発展などにより感染症は克服されたものと一時期認識されていました。しかしグローバル化の結果、感染症が従来想定しなかった速度で蔓延し、社会経済的にも甚大な影響を及ぼしうることが再認識されました。金沢大学医学部の源流で

ある彦三種痘所が感染症克服のために生まれたことを考えますと、感染症は今後も私たちが取り組むべき最も重要な問題の一つであることに変わりありません。

感染症が引き起こす課題に対して、危機の中から新しい潮流が生まれています。令和2年度入学生は対面での入学式や説明会などが全て中止となり、手探りでオンライン講義に取り組み始めています。そのような状況で先日111名がWeb会議システムを用いてネット上で入学後初めて一堂に会する機会がありました。この体験をした医学徒達が、コロナ後において遠隔医療やグローバル感染症医学など、新しい医学・医療を開拓するであろうと確信しています。

(倉知 慎：記)